

続縄文時代前半期の銚頭の研究

高橋 健

1 はじめに

北海道は縄文時代早期以降近世に至るまで骨角製銚頭が使われ続けた地域である。縄文時代においては本州とは異なり開窩式銚頭が発達し（金子 1973）、瀧川はその変遷を銚頭の頭部・胴部・尾部の区分が明確になっていく過程として捉えている（瀧川 1998）。また擦文時代以降近世アイヌのキテに至るまでの変遷にも関心が寄せられているが、おおまかには開窩式銚頭から閉窩式であるキテに向かって「次第に窩が閉じていく」変化が想定されている（前田 1997, 種市 1998a, 石川 1998など）。つまり北海道の伝統的な開窩式銚頭の変遷過程は漸進的な変化の連続として追うことができると考えられている。その中でオホーツク文化と恵山文化では多様な形態の銚頭が発達するなど若干異なった様相がみられる。

恵山文化期には多様で豊富、装飾豊かな骨角器が発達したとされるが、銚頭も例外ではない。一般に銚頭は海獣や大形魚類を対象にすると想定されており、銚頭が発達した北海道においては海獣狩猟の発達と結びつけられることが多いが、続縄文時代における銚頭を対象を具体的に考察した例は少ない。木村は続縄文時代遺跡出土の動物遺存体種名リストを示し、銚頭が発達した大型魚・海獣狩猟を結びつけている（木村 1983）。これに対して西本は動物遺存体の分析から北海道における縄文時代・続縄文時代の狩猟・漁労活動を一連のものとする立場を表明している（西本 1984a）。また新美は縄文時代の北海道における海獣狩猟の発達過程を論じたが、噴火湾沿岸では縄文前期以降、全道的にも後期には海獣狩猟の技術が確立していたと結論している（新美 1990）。結局動物遺存体の検討からは縄文から続縄文にかけて大きな画期を見出せず、銚頭の変化をストレートに生業に結びつけるのは難しい。また縄文時代後期の例になるが礼文島の浜中2遺跡と船泊遺跡では共に多量のアシカ骨が出土しているが、骨角器の組成においては対照的である。このことは狩猟方法や遺跡利用時季の差と解釈されているが、出土した骨角器と狩猟活動を簡単には結び付けられないことを示している（佐藤 2000, 西本 2000a）。

恵山文化の骨角器のもつ資料的な偏り、すなわち副葬品が多く日常生活における骨角器のセットを反映しているとは限らないという点からも、銚頭の形態的発達を銚頭の隆盛と単純に解釈することはできない。だがそうだとすると、骨角器を副葬する習慣そのものや銚頭の形態の多様化に銚頭のもつ社会的な意味の変化を読み取る意見もある（西本・大島 1988）。このような骨角器の社会的

機能の研究の可能性は以前から指摘されていたが（後藤 1982など）、副葬品が多いという恵山文化の銚頭のもつ特徴を考えれば今後成果が期待できる方向である。

恵山文化の銚頭が最も議論されてきたのは、その系統論についてである。続縄文時代に出現する新しい要素を外からの伝播によって説明する点では一致していたが、その源について意見が分かれていた。資料に採集品が多く実証的な研究が困難だったが、80年代以降に噴火湾沿岸を始めとして資料がかなり追加されたこと、特に有珠モシリ遺跡（旧称有珠10遺跡）の資料が紹介されたこと（大島 1988a, 大島他 1988・1989）によって新しい局面を迎えたといえる。最近では「恵山型」といわれるタイプの銚頭について山浦が西日本弥生文化との関連を主張し（山浦 1999）、前田がこれを批判するなど（前田 2000）活発な議論が行われている。

本論では続縄文時代前半期¹⁾の銚頭、特に閉窩式銚頭の編年を行い、その系統について考察する。銚頭研究において分類や用語など基本的な部分で研究者間に食い違いがあることが指摘されて久しいが（前田 1974, 種市 1998b など）、このことが研究の内容においても噛み合わない部分が生じる原因となっていると考えられる。そこでまず本論で用いる用語や分類基準を整理したい。

2 用語の整理

2-1 銚の定義

銚を次のように定義する。銚とは、狩猟・漁労に用いられる刺突具のうち、獲物の体に刺さった後にその先端部が柄から外れて動物の体内に留まり、先端部に結びつけられたつなにより獲物を確保する機能をもつものである²⁾。

2-2 銚の構成部品

セットとしての銚の構成部分としては銚頭、中柄、柄、繫索、柄結縛紐などが挙げられる。本論で考察の対象とする銚の先端部分は銚頭あるいは銚先と呼ばれているが³⁾、銚先という用語は銚頭の先端に装着する尖頭器を指して用いる例があるので、本論では銚頭という語を用いる。続縄文時代の確実な出土例はないが、柄はおそらく木製であったと考えられる。中柄は民族例などから使用された可能性は十分にあるが、考古資料からは使用の有無の判断が難しいため、本論では銚頭の装着を論じる場合には柄という用語のみを用い、中柄もこれに含める。銚頭を繫ぎとめるつなは銚綱、銚縄、索綱などとも呼ばれる。索、綱、縄はいずれもなわ、つなの意味であるが、索孔や索溝という用語が一般的であることからそれに対応させて索の字を用い、銚頭を繫ぎとめるという機能から繫索という語を採用する。柄に銚頭を固定する役目を果たす紐が使用されることがあるが、柄結縛紐とする。これは繫索と兼用であることが多く索と紐という字を使い分けることは不合理な面もあるが、その反面一字で両者を区別できる利点があるので本論中ではこのように使い分けることにする。

2-3 銚頭の機能

前田は銚頭の機能を刺突・離頭・抵抗・繫留の4つに整理したが(前田 1974)、これに固定機能を加えて考えたい。

- ① 固定機能 銚頭が柄に固定される
- ② 刺突機能 銚頭が獲物に刺さって獲物の体内に入る
- ③ 離頭機能 銚頭が柄から外れる
- ④ 抵抗機能 銚頭が抵抗を受けて獲物の体内に留まる
- ⑤ 繫留機能 銚頭が繫索により狩猟者ないし浮き袋などに繫ぎ留められる

これらの機能は短時間内であっても順序をもっているから、それぞれが次の機能の前提となっているのは当然であるが、さらに幾つか相反する関係にあるものがある。固定機能と離頭機能は共に柄への装着に関わるものだが、刺突の前後で固定と離頭という相反する機能が求められる。また刺突機能を高めることは銚頭が受ける抵抗を減少させることを必要とするから、銚頭がより大きな抵抗を受けるのが望ましい抵抗機能とは相反する面をもつ。これら相反する要求を満たすために銚頭は工夫されているのである。

それぞれの機能は銚頭以外の道具においても必要とされる。例えば固定機能は柄に装着する道具一般、刺突機能は刺突具一般の機能である。またヤスも抵抗機能をもつから、銚頭を特徴づけているのは離頭・繫留機能である。この両者について前田は繫留を離頭の結果であるとして離頭機能を銚頭の機能の中心と考えたが、例えば離頭機能をもつが繫留機能をもたない毒矢も存在することから(馬場 1937)、両者が揃って初めて銚頭のメルクマールとなるものである。ただし実際に離頭するかどうかは装着方法などによっても変わり、セット関係や使用方法が不明な考古資料の観察からだけでは離頭機能の有無は断言しにくい。そのため繫留機能の存在から離頭機能の存在を推測していることが多い。

2-4 銚頭の部分名称

続いて銚頭の部分名称を定める(図1)。獲物に突き刺さるほうを先、反対側を後とし、先端を含む部分を頭部、後端を含む部分を尾部、中間を胴部とおおまかに分ける。

繫留機能に関わる索の装着方法には、孔に索を通す場合と溝や抉りに索を巻く場合とがある。前者は索孔と呼び、後者は雌形銚頭の場合は索溝、雄形銚頭の場合は索肩と呼ぶ⁴⁾。索溝とされる中にも両側から抉りを入れただけの「溝」とはいえないものがあり、索肩とされる中にも溝状のものなど「肩」とはいえないものがあるが、用語としては全て索溝・索肩に含めておく。なお索孔から索を導く溝に対して索溝の語を用いている例があるが(長谷部 1926a)、これは導索溝とする。

銚頭を柄に装着する方法は固定機能と離頭機能を両立させることが求められる。通常は一方にソケットを作って他方を差し込むという方法がとられる。このソケットを窩と呼ぶ。柄と銚頭のどちらに窩を作るかで二通りの場合がある。柄に作られる場合、銚頭には窩に差し込む突起が作られる

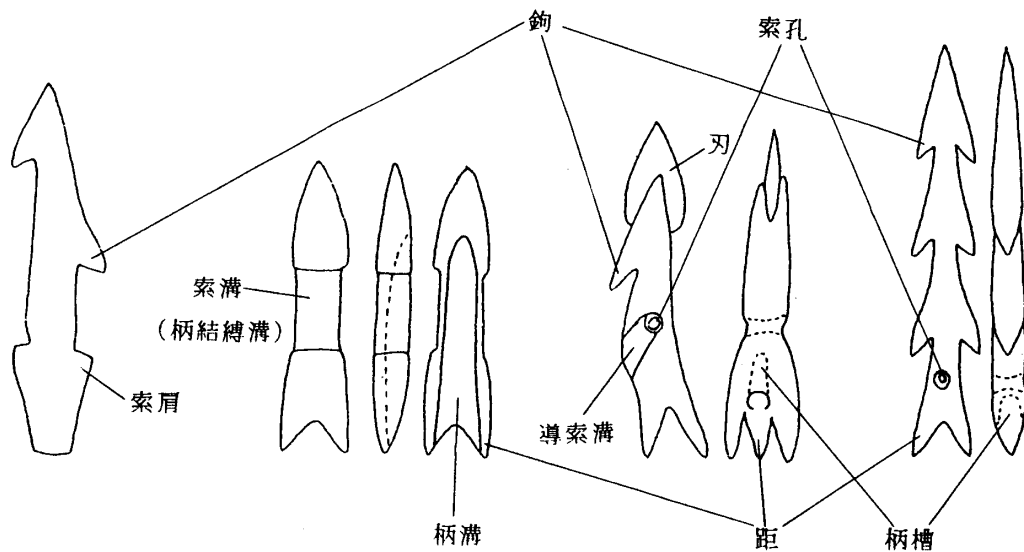


図1 鉾頭の部分名称

が、この突起を茎と呼ぶ⁵⁾。鉾頭に作られる場合には、窩の部分がある場合と何らかの形で開いている場合の二通りがある。前者を槽、後者を溝と表し、柄に装着するという機能からそれぞれ柄槽、柄溝と呼ぶことにする⁶⁾。これまで茎溝・茎槽・茎孔などと呼ばれてきた部分だが、前述したような意味で「茎」を用いるのでこれらの語は使用しない。なおソケットの形態をこのように槽・溝と表す場合（長谷部 1926b など）と孔・槽と表す場合（大塚 1966, 木村 1983 など）とがあり、さらに溝・槽・窩の三者を区別して用いようという意見もある（種市 1995）。しかし同じ槽という字を別の意味で用いる、それも対置されている概念に振り替えてしまうのは用語の混乱を招くだけだろう⁷⁾。

刺突機能に関わる頭部形態には、単に鋭くしているものと他の尖頭器を装着するものがある。前者を尖頭と表す。後者の場合、装着される尖頭器は石・牙・金属などのものがあるが、総称して刃と呼ぶことにする⁸⁾。刃を装着する方法としては、根バサミ状の溝に挟むものとスプーン状もしくはシャベル状の頭部に片面を合わせて固定するものがある。後者は刃を装着するための面を作っていることに注目し刃装着面と呼ぶことにし、前者は刃装着溝とする⁹⁾。

鉾頭の抵抗機能を発揮する部分を鉤・距と呼ぶ。鉾頭の尾部にある場合を距¹⁰⁾とし、それ以外を鉤¹¹⁾とする。

3 鉾頭の種類

鉾頭の種類の種類には大きく分けて柄装着方法によるものと抵抗機能を発揮する方法によるものがある。

3-1 柄装着方法による分類

柄装着方法による分類には簡明で普遍的に適用可能だという利点がある。機能面では主に固定機能と離頭機能に関わり、また柄や柄結縛紐という銚の他の構成部品に関係するという点でも重要である。

3-1-1 雄形／雌形

前述したように柄装着方法としてソケット（窩）を作ることが多いが、柄に作る場合と銚頭に作る場合とがある。Leroi-Gourhan はこれらをそれぞれ雄形／雌形として分類した(Leroi-Gourhan 1946)。ただし考古資料では柄先端の形状やセット関係はほとんど不明であるので、実際には銚頭にソケットがあるものを雌形、ないものを雄形として分類している。

この分類は広く知られているが、「銚頭研究において非常に有効」(山浦 1973)と評価されているにも関わらず、後述する回転式／鉤引式の分類と意識的・無意識的に混同されており、その有効性が十分に発揮されているとは言いがたい。この分類の重要性は次のように説明できる。銚の構成部品のセットを考えると、雄形と雌形は同じセットの中では機能せず別々のセット(別々の柄)を必要とする。つまり雄形と雌形には明らかに互換性がない¹²⁾。これは直ちに両者の使用目的や方法が異なっていたことを意味するものではないが、この分類を重視する理由としては十分であろう。

ただしこの分類も全ての銚頭に適用可能なわけではない。後藤によるとポリネシアに「柄を銚先の側面に沿わせて固定するような、雄形とも雌形ともいえない」銚頭があるという(後藤 1992)。ただしこれは「雄形とも雌形ともいえない」といっても両者の境界線に位置するのではなく、どちらにも当てはまらない資料である。つまり柄と銚頭的一方にソケットを作り他方を挿入するという方法によらずに固定機能と離頭機能の両立を達成しているのである¹³⁾。

3-1-2 開窩式／閉窩式

雌形銚頭の窩の形状によって開窩式／閉窩式に分けることがしばしば行われる。窩が盲孔であるものを閉窩式とする点は一致しているが、開窩式をめぐって見解の相違がみられることが指摘されている(種市 1998b)。この齟齬は本論で扱う範囲では資料操作に影響を及ぼさないが、簡単に触れる¹⁴⁾。とりあえず開窩式ではない銚頭を非閉窩式と呼んでおこう。

まず同じ対象に用いられる半開窩式もしくは半閉窩式という分類についてである。種市は、半閉窩式は開窩→閉窩と変化する北海道で、半開窩式は閉窩→開窩と変化する極地で、それぞれ設定されたために呼称が異なっていると考えている。しかし個々の銚頭について考えた場合、一旦閉じた窩を作ってこれを切り開くことは可能だが、開いている窩を閉じることはできない。従って半閉窩式という用語は適切ではなく、半開窩式として開窩式の下位分類とすべきである。

次に非閉窩式=開窩式とする立場に対して開窩式をより狭く考える立場についてである。駒井・佐藤はモヨロ貝塚の資料を「柄に取り付ける部分が溝になっている」有溝型と「柄に取り付

ける部分が窩になっている」有窩型に分類し、さらに開窩・閉窩という分類も行った(駒井・佐藤 1964)。非閉窩式を溝／窩の形状により有溝型と開窩式に分類していることになるが、分類基準は明示されていない。

一方前田は開窩式・閉窩式を合わせてソケット式として捉え、有溝型をこれと分けたが、やはりソケット式と有溝型の分類基準は明示されていない(前田 1967)。また有溝型について「ソケット式とは異なる系列」としながら「索溝にくくりつけた銚縄の一端が・・・ソケットを形成する」と述べているので、「ソケット」の内容が不明確である。前田はさらにこの有溝型を茎溝式と言い換えて「広義の開窩式」であるとし、「狭義の開窩式」は繫索と柄結縛紐が分離している資料を指して用いている(前田 1974)¹⁵⁾。非閉窩式を繫索と柄結縛紐の関係を基準に茎溝式と開窩式に分類していることになるが、この分類では分類名称はソケット部分の形状(茎溝／開窩)を用いているのに、それ以外の要素(繫索と柄結縛紐の関係)を分類基準にしているので分かりにくいものになっている。

種市は開窩式／閉窩式ではなく、単式ソケット(茎槽Ⅰ・Ⅱ式)／組み合わせ式ソケット(茎溝Ⅰ・Ⅱ式)という分類を行った(種市 1998b)。茎溝式は佐藤の有窩型を言い換えたものだとし、分類基準については、窩が単独で柄を支える構造をもつか否かという点に求めている。分類基準となっていないが今問題にしている開窩式と閉窩式の関係についてみると、茎槽Ⅰ・Ⅱ式、茎溝Ⅰ・Ⅱ式はそれぞれ閉窩式、半開窩式、開窩式、「開窩式」とされている。つまり非閉窩式が半開窩式、開窩式、「開窩式」に三分されていて、開窩式と「開窩式」、すなわち茎溝Ⅰ式と茎溝Ⅱ式の分類基準は繫索と柄結縛紐の関係に求められている¹⁶⁾。これは窩の形態による分類ではないが、開窩／閉窩という窩の形態による分類の延長で処理したために、カギカッコの有無で区別するという無理が生じている。それよりもどちらも開窩式とした上で新たな基準により分類するべきだろう。

このように開窩式の範囲を狭く限定しようとする方針は、開窩式概念をわかりにくくしてしまう。そのため本論では非閉窩式を開窩式とする簡明な分類基準を採用する。

3-1-3 繫索と柄結縛紐の兼用／独立

前項でみたように繫索と柄結縛紐の関係がしばしば分類基準として用いられてきた。これは索溝が柄結縛溝を兼ねている、すなわち繫索が柄結縛紐を兼ねている開窩式銚頭が北海道で伝統的に用いられ、その変遷過程が問題となってきたためである。本論ではこれを窩の形態による分類とは別に扱う。繫索の機能に注目し、これが柄結縛紐を兼ねていて固定・離頭機能に関わっている銚頭を索紐兼用式、柄結縛紐を兼ねておらず固定・離頭機能と直接関係しない銚頭を索独立式とする。閉窩式銚頭や雄形銚頭は全て索独立式なので、この分類は開窩式銚頭の細分となる。

3-2 抵抗機能による分類

古くから多用されているにも関わらず、抵抗機能に関する分類については今も研究者間で意見の

相違がみられる。それは抵抗機能が発揮されるのが獲物の体内に突入してからであり観察が困難であること、抵抗機能が実際にどう働くかに関わる要因が多岐にわたるためだろう。その意味で基準が明確でないため曖昧であるという批判は正しい（山浦 1980a）¹⁷⁾。しかし明確な分類が困難な資料が存在するという事は必ずしも分類の枠組みそのものが有効でないということを意味するものではない。

3-2-1 回転式と鉤引式

抵抗機能を発揮する方法としては、銚の器体に設けられた鉤による方法と獲物の体内での器体の回転によるものがある。わが国で両者を最初に区別したのは馬場脩で、アゲ引き法とキテ式引き寄せ法と呼んでいる（馬場 1937）。後者については回転式という用語が定着している。前者については鉤引式、カエリ式、逆鉤式、逆刺式、非回転式などと呼ばれ一定していない。回転式は抵抗機能を発揮するための銚頭の運動を表しているから、これに対置する用語として「鉤で引く」という運動を表した鉤引式を採用する。

3-2-2 柄装着方法と抵抗機能の関係

回転式／鉤引式の分類と前述した雄形／雌形の分類との関係をどう考えるかについては幾つかの立場がある。

- ① 回転式＝雌形、鉤引式＝雄形と対応する
- ② 雄形は全て鉤引式だが、雌形には回転式と鉤引式がある
- ③ 回転式／鉤引式、雄形／雌形の分類は相互に独立したものである
- ④ 雄形・雌形とも、離頭機能を有するものは全て回転式と考える

①の立場は「雌形銚頭を広義の回転式銚頭として、便宜的に使用する」方法である（山浦 1973）。例えば木村は続縄文時代のいわゆる「恵山型」¹⁸⁾の銚頭について「むしろ機能を推定し、B式（鉤引式・・・引用者註）とした方が良い」としながら、「茎孔（柄槽・・・引用者註）を基準とした従来の分類に従った」として回転式に分類している（木村 1983）。

②の立場は回転式／鉤引式の区別を雌形銚頭の細分とみなすものである。Leroi-Gourhanはこの立場であり（Leroi-Gourhan 1946）、山浦は「その構造から雄形銚頭はおよそ回転式銚頭とは考えられず、さらに雌形銚頭とされるものの内でも、その一部を本来は回転式銚頭と呼ぶべきだろう」と述べている（山浦 1973）。そして雄形である「南境型」「沼津型」を回転式とする考えを否定し（山浦 1973）、雌形である「恵山型」を鉤引式であると考えている（山浦 1999）。

③の立場は両者を独立した基準とみるものである。種市は「雄形銚頭－回転式、雌形銚頭－逆刺式という資料は存在するが機能上の観点からそれほど普及しなかった」と述べている（種市 1998 b）。前者としては「南境型」、後者として「恵山型」を例示している。

渡辺は④の立場によって縄文時代の銚頭を分類している（渡辺 1973）。銚頭全体を「回転式離頭

銚頭」と「固定式銚頭」に大別しているが、「離頭銚頭」を全て回転式としていることになる。これはいわゆる「沼津型」にあたる銚頭を「回転式」だとしている楠本の用語法を継承したものだといえる（楠本 1960など）¹⁹⁾。金子・忍澤は楠本による「古式離頭銚」（渡辺の「南境型」）を用いた実験（楠本 1969）を根拠にしてやはり「銚には回転機能が基本的に認められる」とし、ゆえに『「回転式」という呼称を限定された銚頭にだけ使うことはできない』として抵抗機能による分類の枠組みそのものに否定的である。（金子・忍澤 1986）。瀧川も「実験考古学的に確認できない限りは、机上の空論に陥りかねない」として「抵抗状態に基づいた用語の使用は控える」という方針を採っている（瀧川 1998）。

④は鉤引式の存在自体、あるいは抵抗機能を分類基準とすることそのものを否定する。確かに実験はある種の雄形銚頭が一定の条件の下で回転運動をすることを示しているが、その結果は全ての銚頭が回転運動をすることを証明するものではない。回転運動には多くの要因が関わるので、ある銚頭が回転運動を行う、あるいは行わないと断言するのは難しい。しかし実験結果や民族例を参照して「銚頭の全体的形態から、獲物体内において、銚頭が回転することを意図して作られているか、いないかという判断」（山浦 1999）を行うことは可能であるし、分類基準としても意味があるだろう。

次に①～③について考える。雄形／雌形と回転式／鉤引式という二つの分類は、それぞれ固定・離頭機能に関わる柄装着方法と抵抗機能を発揮する方法による分類であり、そもそも立脚点が異なっている。雄形／雌形という分類と開窩式／閉窩式という分類は共に柄装着方法によっているので、例えば雄形－開窩式という銚頭の存在は先験的に否定される。これに対して雄形／雌形と回転式／鉤引式の場合はどの組み合わせも先験的には否定できず、回転式／鉤引式の分類基準が柄装着方法の分類基準とは別に必要である。これは雄形－回転式や雌形－鉤引式の銚頭が実際に存在するかどうかとは別の問題である。

よって①の立場は山浦の言うように便宜的なものでしかありえず、②の立場も成立しない。そこで③の立場にたって回転式と鉤引式を定義する必要がある。本論で行う定義は確かに机上のものに過ぎないが、分類の結果に食い違いが生じている以上、仮設的なものであっても分類基準を明らかにしておく必要があると考える。

3-2-3 抵抗機能についての考察

回転式の認定は前述した「銚頭の全体的形態から、獲物体内において、銚頭が回転することを意図して作られているか、いないかという判断」（山浦 1999）によって行う。これに対して鉤引式は、獲物体内において鉤による抵抗をうけることを意図して作られているかどうか、を判断することになる。前項の①～③の立場は「南境型」と「恵山型」の分類を巡って対立しているが、日本列島先史時代の銚頭に関する限り食い違う点はこれだけである。つまり大部分の銚頭については大方の認識が一致している。ここでは大方の認める回転式と鉤引式がどう区別されているかを考え、分類基

準を確立した上で争点となっている形態について考察する。全ての要因を考慮していたのでは煩雑になりすぎるので単純化したモデルを考える。

銚頭が獲物体内で行う運動は実際には回転というよりも転移であること、つまり銚頭が体内で移動することが指摘されている(大塚 1966)。しかしこの点を捨象すると、繫索の方向(=力の方向)は常に同じになるので、この方向の獲物側を上、狩猟者側を下とする。刺突が終了して繫留の力が加わる時点を初期時点とし、銚頭は獲物の体内に十分に深く撃ち込まれていると考える。銚頭に加わる力には繫索の張力 F と銚頭が受ける抵抗力 R がある。繫索が受ける抵抗は無視し、ある時点の銚頭にかかる F と R だけを考え、銚頭を回転させるような力(以下回転力とする)が生じているかどうかを判断する。 F の作用点を P とすると、 P は索孔もしくは索溝に位置する。また鉤、距など器体につけられた抵抗機能を発揮する部分を抵抗装置と呼ぶことにする。

一般に剛体が回転運動をするかどうかは任意の点を中心とした力のモーメントの和によって判断することができる(モーメントの和が0であれば回転しない)。「力のモーメント=作用線までの距離×力の大きさ」であるから、作用線が中心を通る力は全て無視してよい。つまり P を中心として考えれば、 F については無視してもよい。従って R の大きさと作用線までの距離が問題になる。 R の大きさが0であることは考えられないから、 R のモーメントが0になるのは、 P から R の作用線までの距離が0である、つまり R が P を通る場合である。これ以外の場合モーメントは0ではなく回転力が生じる。図2のaのように抵抗装置が対称について P が銚頭の中心軸上にある場合、 R は P を通るからモーメントは0であり回転力は生じないので、鉤引式として問題ない。一

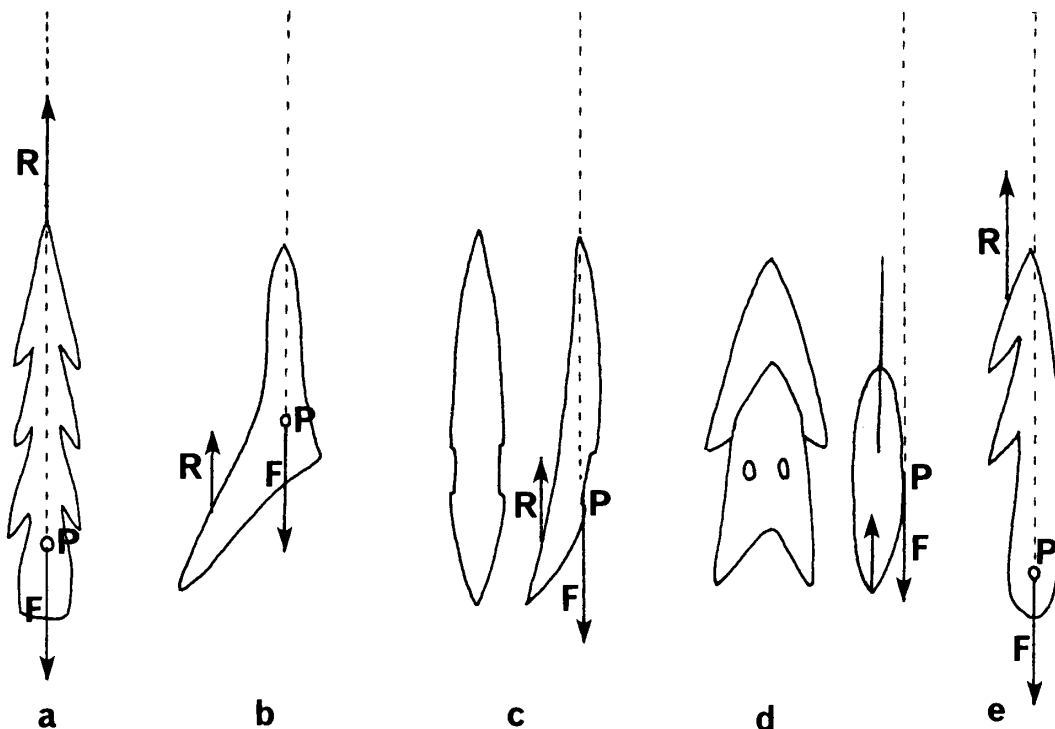


図2 銚頭に働く力(1)

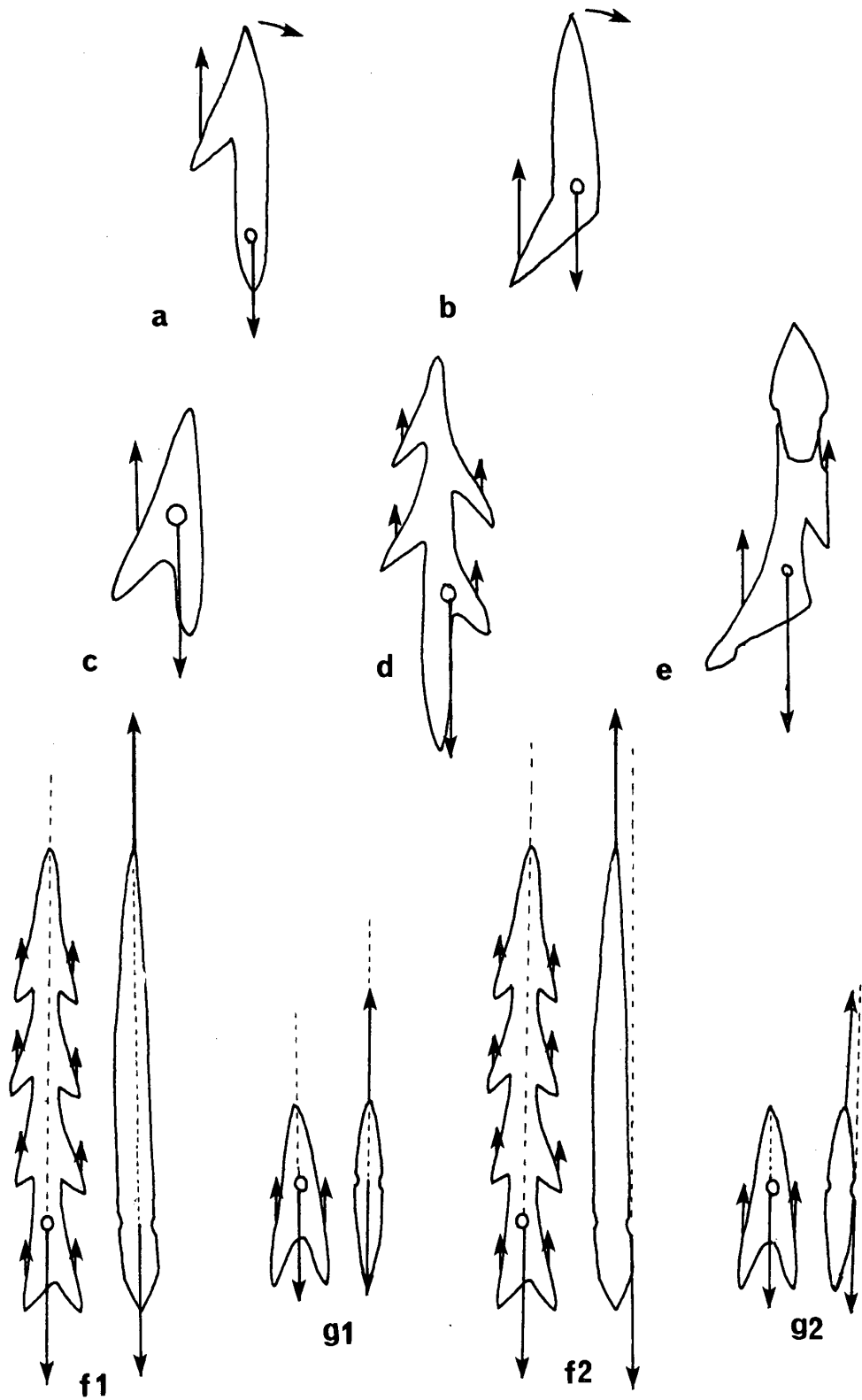


図3 鉬頭に働く力 (2)

方 b の場合は抵抗装置が非対称であり回転力が生じる。c のような場合は器体と抵抗装置を明確に区分できないが、P よりも下方全体を抵抗装置と捉えればやはり回転力が生じる。d の場合抵抗装置は対称であるが、P の位置が中心軸上にないのでやはり回転力が生じる。つまり回転力が生じる条件は、抵抗装置が非対称についていること、あるいは P の位置が中心軸からずれていることである。しかしこの基準によれば e のような場合も回転力が生じることになる。これを回転式として a と区別するのはあまり説得力がない。

そこで回転力が生じることと、銚頭が回転するように作られていることとを区別する必要が生じる。図 3 - a・b のように抵抗装置を一つだけもつような銚頭において、抵抗力 R と P の位置関係に注目する。a・b 共に時計回りの回転力が生じる。a のように抵抗装置が P よりも上方に位置する場合、回転することによって R の作用線と P との距離が小さくなり、モーメントも減少する。これに対して b のように抵抗装置が P よりも下方に位置する場合、回転することによって R の作用線と P との距離が大きくなり、モーメントが増大する²⁰⁾。本論ではこの違いを重視し、P よりも下方に位置する抵抗装置だけを「銚頭が回転するように作られている」と考える。

これによって抵抗装置が P よりも上方だけに位置する図 2 - e は鉤引式と判断される。図 2 - b~d の場合は抵抗装置が P よりも下方だけに位置し、かつ R の作用線が P を通らないので回転式と判断される。

さて図 3 - c はいわゆる「南境型」であるが、この場合抵抗装置である鉤は非対称で、索孔よりも下方に位置しているから、回転式である²¹⁾。

次に P の上方と下方の両方に抵抗装置が存在する場合を検討する。図 3 - d・e のような場合は鉤引機能と回転機能を両方もっていることになるが、どちらが優先しているかを考える。上方の抵抗装置と下方の抵抗装置の大きさと数を考慮して判断することになる。この場合 d は鉤引式、e は回転式と判断する²²⁾。f と g はいわゆる「恵山型」である。下方の抵抗装置である距は対称に作られているが、繫索が中心軸上に装着されるかどうかで二通りの場合が考えられる。繫索が中心軸上に装着される場合、初期状態で回転力が生じないので、鉤引式である (f 1, g 1)。繫索が索孔にループ状に通される場合はこれにあたる。これに対して繫索が中心軸からずれて装着される場合、初期状態で回転力が生じる。上方の鉤が多ければ鉤引式、少なければ回転式である (f 2, g 2)。繫索が索孔よりも大きな結び目を作って留めるような方法で装着される場合はこれにあたるが²³⁾、筆者は「恵山型」にこのような方法で繫索を装着していた可能性は少なく、従って全て鉤引式であると考えている。

3-2-4 方向の設定

回転式銚頭が回転するときには銚頭の中心軸が通過する面を回転面とする。そして回転運動の結果抵抗を受ける側面を腹面とし、反対側を背面とする²⁴⁾。頭-尾 (上-下)、背-腹の方向を決めたことで、左右も自動的に決まる。特に刃と索孔の方向に関しては、背腹方向を縦、左右方向を横と

呼ぶ。

鉤引式銚頭については機能上左右の区別はないが、便宜上定めておく。銚頭の最大幅面で銚頭を2つに分けたとき、より凸になっている側を表面、より平らもしくは凹む側を裏面とする。表面が見えるように置くと、上下は既に決まっているから左右も自動的に決まる。両面がほぼ対称な場合は装飾が多く素材の緻密質が多い側を表面とし、海綿質が多い側を裏面とする。刃と索孔の方向に関しては表裏方向を縦、左右方向を横と呼ぶ。

3-3 続縄文時代の銚頭の分類

銚頭全般を対象にした分類方法について考察してきた。ここでこれまで続縄文時代の銚頭がどう分類されてきたかを概観し、問題点を明らかにしたい。

渡辺は続縄文時代の銚頭には燕形、恵山型、挟入離頭銚(一王寺型)があるとした(渡辺 1973)²⁵⁾。縄文時代を対象とした研究書でありやむを得ない面はあるが、燕形と挟入離頭銚という用語は他地域・他時期で用いられているものを内容をずらして適用しようとするものであって、通時間的・通空間的な議論を行う際に混乱をきたす恐れがある。燕形という呼称を拡大して続縄文時代の銚頭に適用するのは東北地方の燕形銚頭との系統関係を前提としており、また両者をどう区別するかは示されていない。一方挟入離頭銚は大塚により提唱された用語だが(大塚 1966)、尾部が双距をなすものや刃を装着するものは本来含まれないので適切ではない²⁶⁾。

木村による分類は 属性毎にアルファベットの略号を与えてそれを並記するというシステムティックな方法を採用している(木村 1983)。抵抗機能、柄装着方法、鉤の数と付き方、尾部形態、繫索の結縛方法、刃の有無、文様の有無の諸属性が挙げられているが、実際の資料操作で用いられているのは前四者である。まず抵抗機能によって「非回転式/B式」と「回転式/T式」に分類しているが、これは実際には柄装着方法によって判断しているので独立した分類基準とはなっていない。また鉤の数と付き方は項目としては先に挙げられているが、実際には尾部形態で分類した後の細分となっている。つまり柄装着方法と尾部形態による分類がまず行われており、挿入式(I式)、茎孔式・双尾式(S-ds式)、茎孔式・単尾式(S-ss式)、茎槽式(Tr式)の4タイプに大別されている。大島は木村の分類方法からその大枠となっている柄装着方法と尾部形態による分類を引き継いで、茎孔式単尾/茎孔式双尾/挿入式/茎槽式を設定している²⁷⁾(大島 1988a)。そしてこのうち茎孔式単尾銚頭を頭部形態により3つに細分して変遷過程を論じている。

しかしこの木村と大島の分類では回転式/鉤引式の分類基準が明確ではなく、そのために不都合が生じている部分がある。図4に6点の銚頭を示したのでこれによって問題点をみていきたい。まず注意しておきたいのは単尾/双尾の区別は距の数によって行われているのではないという点である。木村、大島は共にd~fを「S-ss式」「茎孔式単尾」としているから、距の数は1~3個のものが含まれている。これに対してaやbのような銚頭を「S-ds式」「茎孔式双尾」に分類している。距の数ではなく距の形態によって、つまり側面観が対称なものを「双尾」としているのは明らか

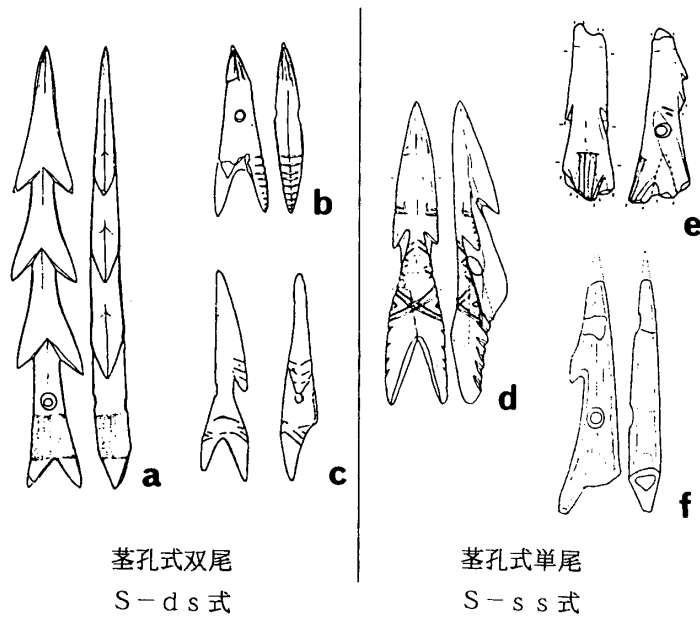


図4 「茎孔式単尾」「茎孔式双尾」銚頭

かだろう。この距の対称性という点は回転式／鉤引式の種類基準だから、この単尾／双尾という分類は銚頭の抵抗機能による分類だといえる。しかし木村は「茎孔式」を全て回転式としているためにこの単尾／双尾の分類を意味付けできず、曖昧さを残している。木村はcの銚頭を「S-ds式（茎孔-双尾式）」に分類し、「索孔が体部を水平に貫き、尾部が片面のみ鋭く削りとられており（側面観が片刃状になる）特異である」と述べている。また大島は直接この資料を扱っているわけではないが、茎孔式単尾が祝津から1例出土していると述べており、これは図8-1のことを指していると考えられるので、やはりcを「茎孔式双尾」に分類していることになる。しかし距の対称性という基準によれば、これは「単尾」として分類されるべきものであろう。

前田は抵抗機能を重視して木村分類を修正した以下のような分類案を示した（前田 2000）。

- | | | |
|--------------|---------------|----------------|
| I 非回転式（カエリ式） | I-1 雄型 | |
| | I-2 雌型 | |
| II 回転式 | II-1 茎溝式（開窩式） | |
| | II-2 茎孔式（閉窩式） | II-2-a 単尾 |
| | | II-2-b 三尾 |
| | | II-2-c 双尾 |
| | | （I-2群の再加工型を含む） |

木村の分類が抵抗機能と柄装着方法をストレートに結びつけていたのに対し、非回転式に雄型と雌型を含めている。このため単尾／三尾／双尾の分類は回転式を単純に距の数によって分類したものであり、木村や大島による単尾／双尾の分類とは根本的に異なっている。この分類の特徴はII-2-c群にI-2群の再加工型を含めている点である。I-2群は図4のa、再加工型はb、本来

のⅡ-2-c群はcとdにあたる。前田はaを「回転式と非回転式の境界にある」として、再加工による段の減少によって「非回転式から回転式への変換が成された」とみている。本論の基準によればbは鉤引式と判断されるが、仮にbが回転式であるとしても、どこでⅠ-2群とⅡ-2-c群の（すなわち回転式／鉤引式の）線引きをするのかが明らかにされていない。またbはcやdとは製作上の意図・過程が明らかに異なる資料であることから同じ分類に含めるのは問題がある。

3-4 本論における分類

本論ではこれまでに論じた分類基準により、柄装着方法、抵抗機能、緊索と柄結縛紐の関係に基づいた分類を行う（表1）。理論上は8通りの組み合わせがあるが、続縄文時代にはこのうち5つがみられる。これを第1種～第5種とする。

- 第1種 雄形（鉤引式）銚頭
- 第2種 （雌形）閉窩鉤引式銚頭
- 第3種 （雌形）閉窩回転式銚頭
- 第4種 （雌形）開窩（回転）索紐兼用式銚頭
- 第5種 （雌形）開窩（回転）索独立式銚頭

分類基準自体は銚頭の形態のみに基づいているので時期・地域を問わずに適用可能だが、本論で第1種～第5種という場合には続縄文時代の銚頭のみを指す。また燕形銚頭、沼津型銚頭、寺脇型銚頭という名称も、東北地方縄文後晩期の銚頭を指す場合に限定して用いることにする。なお本論で扱う時期においては第5種の索独立式の例は非常に少ないことから、断りなしに「開窩式」という場合は第4種の索紐兼用式を指すものとする。

4 問題の所在


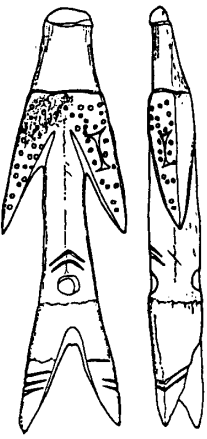

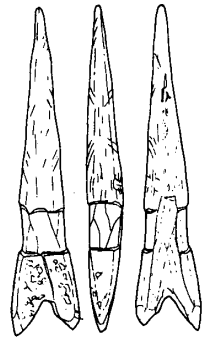
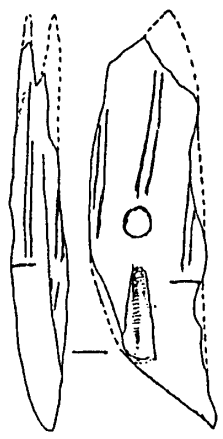
続縄文時代の銚頭の系統及び編年についての研究史を検討する。主な論点は第2種銚頭の系統と第3種銚頭の編年についてである。

4-1 第2種銚頭の系統

日本列島先史時代にはほとんどみられない形態の第2種銚頭を北方系統として説明することがあったが（金子 1980）、具体的な立論が可能な資料は提示されなかった。そのためこれを日本列島内での銚頭の系統に位置づける試みがなされてきた。

柄装着方法からは閉窩式である燕形銚頭との関係がまず考えられるが、それ以外の相違点について何らかの説明を必要とする。渡辺は燕形銚頭と第2種銚頭の主な違いを鉤の方向と尾部形態の違いだと捉えた（渡辺 1973）。そしてこれらを「挟入離頭銚頭」の影響として説明し、燕形銚頭と「挟入離頭銚頭」の融合によって「挟入離頭銚頭を二つ腹面で合わせたような形態」が生まれたと考えた。この場合の「挟入離頭銚頭」は尾部の平面形態において第2種銚頭に似ているのだから、

表1 銚頭の分類

		柄の装着方法			
		雄形	雌形		
			閉窩式	開窩式	
				索紐兼用式	索独立式
抵抗機能	鉤引式	 <p>第1種</p>	 <p>第2種</p>		
	回転式		 <p>第3種</p>	 <p>第4種</p>	 <p>第5種</p>

(続縄文時代における資料のみを図示している) S = 1/2

当然双距である。ただし渡辺がこの「抉入離頭銚頭を二つ腹面で合わせた」という表現を具体的な融合過程を指して使ったのかどうかは疑問であり、単に形態を形容したものである可能性が強い。従って燕形銚頭の窩の形態と「抉入離頭銚」の尾部形態が融合したものと考えていたことになる。しかし共に回転式である燕形銚頭と「抉入離頭銚」の融合から鉤引式の第2種銚頭が生じるという

抵抗機能の転換を説明できていない²⁸⁾。

これに対して山浦は第2種銚頭の抵抗機能が鉤引式である点を重視し、閉窩式かつ鉤引式である銚頭を祖形として求める方針を採った²⁹⁾。山浦はまず第2種銚頭と寺脇型銚頭の関連を想定した(山浦 1996)。寺脇型は福島県寺脇貝塚の資料によって渡辺が設定した型式であり、尾部の発達が弱く背腹左右に対称な閉窩式銚頭である。一般的には局地的なタイプと考えられているが、山浦は愛知県神明社貝塚の資料を寺脇型類似資料と考え、これを根拠に同様な銚頭が東北北部・北海道にも分布する可能性があるとした。そしてこれを基礎として第2種銚頭が成立したという寺脇型系統説を提唱している。ただしこの考えは時空的に隔たりの大きい資料を結びつけようとしたものであり無理が多かった³⁰⁾。

山浦は寺脇型系統説を撤回し、沓岐原の辻遺跡出土の弥生時代中期の銚頭を第2種銚頭の祖形だと考えた(山浦 1999)。これは単距の開窩式銚頭に似た形態の部品を2つ組み合わせて、閉窩・双距の銚頭とした組み合わせ式の銚頭である(図5)。先端には金属製の端刃を挟むスリットができる。これを本論では組み合わせ式双距銚頭と仮称する。山浦は島根県西川津遺跡の資料も類例だと考え、西日本の弥生文化の組み合わせ式双距銚頭が伝播して第2種銚頭の祖形になったと考えている。

一方前田は渡辺説と山浦説(後者)を第2種銚頭の祖形に合わせ銚を想定するものとして一括し、刃装着部の形態、索孔、鉤などに製作技術上の飛躍がみられ、観念的レベルを超えることができないと批判している(前田 2000)。そして機能分類(抵抗機能の分類を指している)を重視する立場から、同じ鉤引式の第1種銚頭にその系統を求めている。類似点としては定型的な鉤の形状、相違点としては第1種が全て尖頭である点と柄装着方法を挙げ、相違点のうち前者は獲物の違い、後者は使用上の何らかの必要にかられての転換として説明している。そして柄装着方法の転換について「当時の日常生活における様々道具の柄づけにおいて『雌型』・『雄型』の選択の機会は多かった」から「技術上の飛躍を想像する必要はない」としている。

4-2 第3種銚頭の編年

第3種銚頭の系統については燕形銚頭との類似点を重視する燕形系統説³¹⁾と相違点を重視して北方に系統を求める北方系統説とがあった。北方系統説は長谷部によって最初に唱えられ(長谷部 1926a)、金子もこの立場を採った(金子 1980)。燕形銚頭との相違点としては横方向の索孔、導索溝の存在、刻線による装飾、発達した腹鉤、製作時の材料の扱い方などが挙げられている。このう

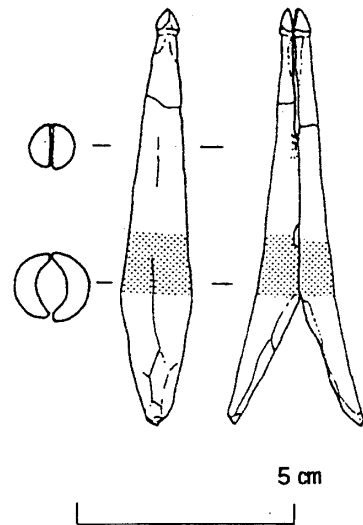


図5 弥生時代の組み合わせ式双距銚頭
(沓岐原の辻)

ち最大の違いとされたのは索孔の方向であるが、弥生時代中期の三浦半島やいわき地方の閉窩回転式銚頭の索孔がやはり横方向であることから、日本列島における同時代的現象として理解されるようになってきている。そのため燕形系統説が有力になるが、索孔の方向以外にも違いがあるのは事実であり、それをどう説明するかが焦点になる。

大塚は恵山貝塚と祝津貝塚の資料を比較して、後者に「晩期亀ヶ岡式文化の系統に属すとおもわれる銚も含まれて」いることを指摘している（大塚 1966）。おそらく図8の1ないし3のことを指しており、これが恵山貝塚の第3種銚頭（図10-3・4）よりも燕形銚頭に近いと言っていることになる³²⁾。

大島は有珠モシリ遺跡の「茎孔式単尾」銚頭（≒第3種）を頭部形態によってE/U/Mの3タイプに細分している（大島 1988a）。それぞれ刃装着面・刃装着溝・尖頭に対応する。そして燕形銚頭→M・Uタイプ→Eタイプの変遷を考えている。前二者は尾部と頭部の形態が共通し、後二者は「体部索孔上方の小突起や腹面のアグ」が共通している。結果として第3種銚頭は新旧二段階に区分され、大塚の示唆していたものと一致するが、資料の裏付けを与えて明確にしたものである。

大竹憲司は北進した燕形銚頭が「開窩式の技術とドッキングして単尾の燕形閉窩式を出現させる」とした（大竹 1991）。燕形銚頭と第3種銚頭の違いを距の減少と捉え、その原因を第4種の影響に求めたのかもしれないが、詳しい説明はなされていない。

前田潮はⅡ-2群（≒第3種）をまず尾部の数によって細分し、さらに頭部形態の分類（E/M/Uタイプ）を採用している（前田 2000）。そして第3種銚頭の中で三距のUタイプを最も燕形銚頭と近縁性が高いと位置づけ、これをもとに単距のM・Eタイプが発達したと考えている。双距の資料は、第2種の鉤の段数が少ないものと区別されていないこともあり、この変遷過程には位置づけられていない。

大島と前田は共に燕形銚頭に近い要素を古く、恵山貝塚の第3種銚頭にみられる要素を新しくみて、新旧を考えている。この方法自体は妥当なものだろう。大島による分類は頭部形態を基準にしているように読めるが、実際にはそれだけではない。何故なら恵山貝塚出土の資料には尖頭になる例（図10-4）があるが、大島は明らかにこれをMタイプとは考えていないからである。このことからEタイプとMタイプは頭部形態以外の要素、おそらく全体の形状によって区別されていることが分かるが、分類基準は明確にされていない。これに対して前田による分類は距の数と頭部形態という基準のみによっていて明快である。そのため恵山貝塚の図10-4はMタイプに分類されている。しかし例えば本輪西貝塚の図8-2も同じⅡ-2-a群のMタイプに分類されるが、果たしてこれらを同じに分類していいのか疑問がある。有珠モシリ遺跡の図9-3のような三距のEタイプになる資料や双距の資料の位置づけをどうするかも問題である。

4-3 本論の方針

第3種銚頭は新旧の二段階に分けられているが、細分を行うには頭部形態や距の数のみによる分

類では難しい。本論ではある程度まとまった資料同士の比較から異同を見出していくという方法を採る。層位的データの不足からやはり大まかで仮設的なものに留まらざるを得ないが、今後の研究の叩き台として提示したい。そして第1種・第2種銚頭についてもこの第3種銚頭の編年との対比を行い、その後で第2種銚頭の系統について検討する。

5 資料

続縄文時代の第1種～第3種・第5種銚頭を図8～10・12～25に掲載した。第4種銚頭は本論では検討の対象としない。第1種～第5種の出土遺跡は図6と表2に、第1種～第4種の分布は図7に示した。銚頭として報告されている資料でも、破片で分類不可能なものなど筆者の判断で除いている場合がある。また一遺跡から第1種か第2種のどちらかだけが出土している場合、鉤部の破片は原則としてそちらに分類している。文献は基本的には表2に掲載し、図の出典は文末に示した。なお素材は鹿角製のものが大多数である。

5-1 噴火湾沿岸～渡島半島太平洋岸の資料

恵山文化の貝塚が多く形成された地域であり、銚頭も質量ともに豊富であるが、採集品など出土状況が明らかでない資料も多い。

本輪西貝塚の資料(図8-2・6・9・10, 図15-12)は本輪西上層式に伴うものとされる。だが第4種の中の1点が窩の形状において擦文期の特徴³³⁾を示しており(佐藤 1954の図版5-3), 時間幅のある資料を含んでいる可能性がある。また図15-12は鉤部破片で第1種と第2種のいずれかは不明。祝津貝塚の資料(図8-1・3, 図18-9, 図25-1・3)としては、室蘭市民俗資料

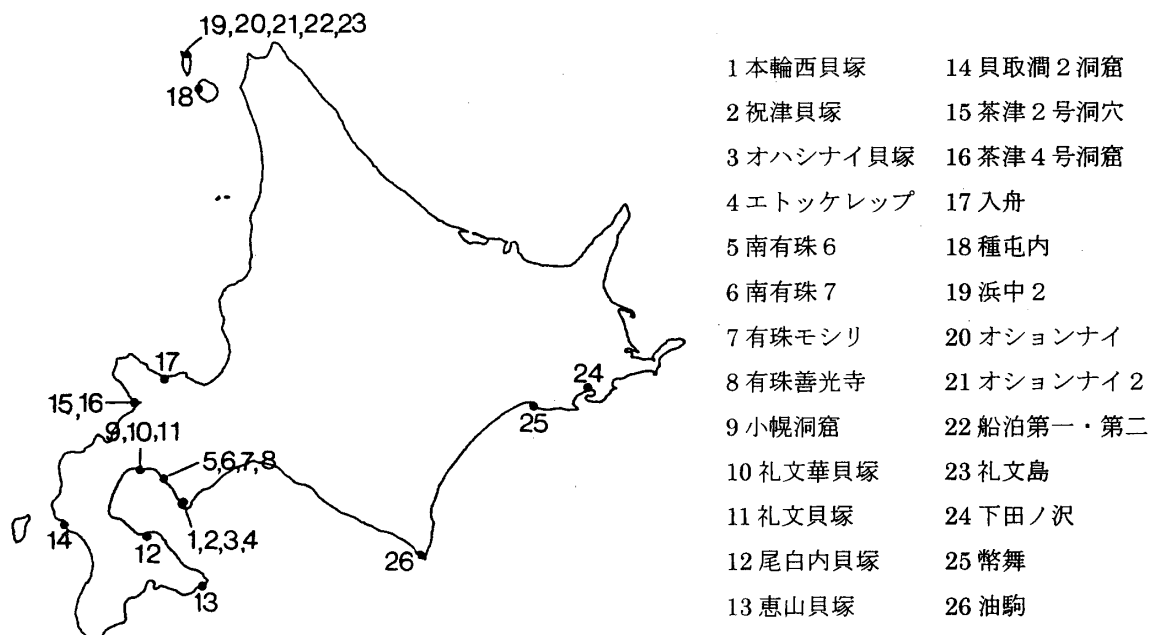


図6 続縄文時代前半期の銚頭出土遺跡

続縄文時代前半期の銚頭の研究

表2 続縄文時代前半期の銚頭出土遺跡

番号	遺跡名	第1種	第2種	第3種	第4種	第5種	不明	計	文献
1	本輪西貝塚			4	5		1	10	長谷部1926a, 佐藤1954
2	祝津貝塚		1	4		2		7	大場1962, 渡辺1973, 室蘭市民俗資料館1990
3	オハシナイ貝塚				1			1	大場1962
4	エトツケレップ				1			1	佐藤1954
5	南有珠6	2	1	3				6	三橋1983
6	南有珠7		1		2			3	峰山1984
7	有珠モシリ	9	18	10				37	大島1988a, 大島他1988・1989, ※
8	有珠善光寺			1				1	※
9	小幌洞窟			1	1			2	北大解剖学教室調査団1953
10	礼文華貝塚		13		3			16	峰山・山口1972, 大島1988b
11	礼文貝塚			1				1	萱場・岡根・清水1952
12	尾白内貝塚		3	1				4	佐藤1954, 渡辺1973
13	恵山貝塚	4	25	4		1		34	小笠原1984, 佐藤・五十嵐1996
14	貝取澗Ⅱ洞窟		1		1		1	3	右代他1992
15	茶津2号洞穴		2		4			6	内山1989
16	茶津4号洞窟				1			1	小樽市博1962
17	入舟		7					7	余市町教委2000
18	種屯内	1		1				2	種屯内遺跡調査団1999・2000
19	浜中2	3						3	西本2000b
20	オシヨンナイ			1				1	名取1933, 佐藤1954
21	オシヨンナイ2	1						1	※※
22	船泊第一・第二	1		1				2	北構1939, 兒玉・大場1952
23	礼文島	5	1			1		7	前田1974, 山浦1993, ※※※
24	下田ノ沢			1	1			2	厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会1972
25	幣舞	2			25	1		28	釧路市埋文センター1996・1999
26	油駒	10			4			14	赤石・中岡2000
計		38	73	33	49	5	2	200	

※伊達市教育委員会所蔵, ※※礼文町教育委員会所蔵, ※※※東京大学総合研究博物館所蔵

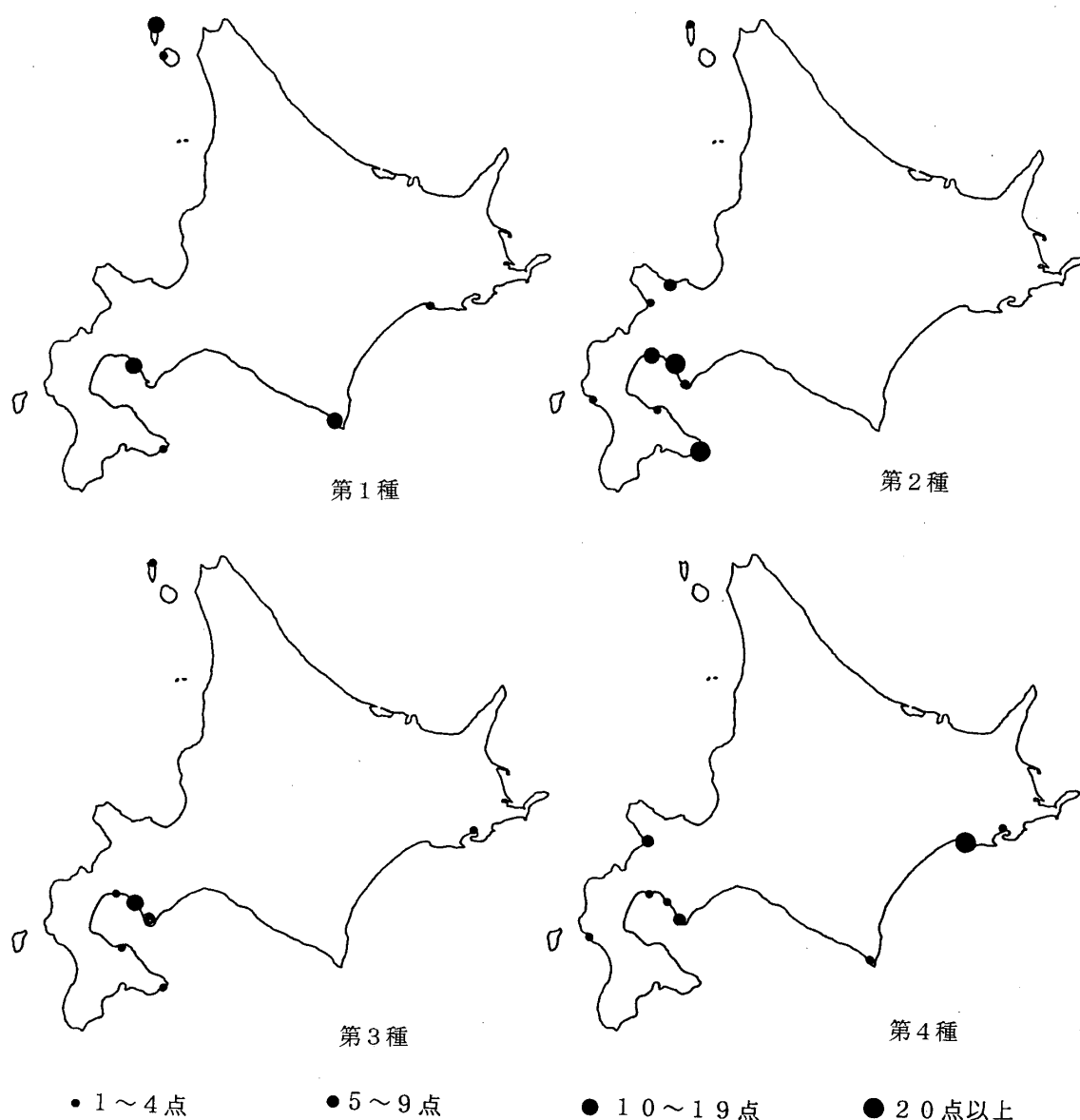


図7 第1種～第4種銚頭の分布

館所蔵の資料中に図示したものと別の資料が2点ある³⁴⁾(室蘭市教委 1990)。それぞれ図8-1・3に類似した形態である。オハシナイ貝塚からは第4種の尾部の可能性がある破片、エトツケレツプ遺跡からは完形の第4種が採集されている。

南有珠6遺跡では銚頭を含む骨角器はほぼ全てVI層貝層から出土している(図8-4・8・11, 図15-10・11)。貝層はこれだけなので攪乱出土の1点(図18-4)についても同時期とみなしてよいだろう。このVI層出土の土器は、甕においては内傾する頸部に無文帯を幅広く残すものが多く、恵山文化後半の南川Ⅲ群に相当するものであろう。南有珠7遺跡でGP023土塚に副葬されていた銚頭(図18-5)は「尾部近くの両面に浅くえぐりをいれて銚索の結び部を作り出している」「現在までに確認されていないタイプ」とされている(瀬川 1984)。しかしこの資料は柄槽がまだ作ら

れていない第2種の未成品とみるのが妥当だろう。両側面の挟りは索孔を穿孔する前の工程でつけられたものだと考える。このような挟りは索孔が十分に大きければ完成品に痕跡を残さないが、有珠モシリ遺跡出土の図23-7などは索孔上部にその痕跡を残している。また想定される索孔→柄槽という製作工程の順序は有珠モシリ遺跡出土の未製品である図22-5においても同じである。

有珠モシリ遺跡は札幌医科大学解剖学第二講座によって1985年～88年に4次にわたる調査が行われた。正式報告は未刊であるが、概報及び銚頭についての論考がある。本論ではこれらで既に報告された資料11点に筆者の観察による資料26点を加えて考察する(図8-7, 図9-1・4・6・7, 図10-1・2, 図12-2, 図15-1～9, 図22・23)。これらの資料は有珠善光寺遺跡の資料と共に伊達市教育委員会所蔵品であり、今回掲載する許可を得たものである³⁵⁾。ただし本遺跡では60点以上の銚頭が出土したとされており、今回紹介する資料はその一部に過ぎない。4号墓出土20点, 7号墓出土4点, 9号墓出土4点, 16号墓出土2点の資料を掲載したが、これらの資料の出土遺構については、それぞれの資料が墓に伴う副葬品であるか、副葬品だとしても同時に副葬されたものであるか³⁶⁾という判断を必ずしも厳密に行っていないため、本報告において訂正される可能性があるものだとすることを付記しておく。それ以外の6点は貝層等の出土であるが、遺跡の周囲全体が墓域であったから、これらも本来は副葬品であった可能性がある。今回考察の対象としたのは主に4号墓出土の資料である。この墓の人骨は1体分であり、副葬品も一次埋葬墓のものがそのまま持ち込まれたと考えられている。7号墓からは第2種と第3種銚頭が刃を装着した状態でまとまって出土しているが、うち第2種銚頭を図示した。一方第9号墓, 第16号墓ではそこまでのまとまりの強い出土状態は報告されていない。また出土状況などは不明だが有珠善光寺遺跡から第3種の未成品が1点出土している(図12-1)。

小幌洞窟B地点出土の第4種は恵山文化期の資料としてよく知られている。一方図8-12はA地点表土出土で双距の銚頭の破片として報告されているが、刻線の装飾と形態から続縄文期の第3種だと考えた。残存する2本の距の長さが異なっていることから、長いほうが中央距であるような三距の銚頭の尾部破片であろう。礼文華貝塚の墳墓には10点の第2種が副葬され、貝塚からは3点の第2種(うち1点は鉤部破片)と3点の第4種が出土している(図18-1～3, 図21)。墳墓には2点の甕が副葬されていたが、なだらかな器形から恵山文化後半の南川IV群に位置づけることができるだろう。また伊達高等学校郷土研究部によって「礼文貝塚」出土の双距の第3種銚頭が報告されている(図8-5)³⁷⁾。採集された遺跡は「礼文川左岸の藤原氏所有地に二ヶ所存在する(昭和二十六年七月現在)。表土十三～十五糎の下にイガイを中心とした貝塚であり、貝層約四十糎内外と思われる。土器形式は亀ヶ丘式末期のもので、骨製品に優秀なものがある」という³⁸⁾。

尾白内貝塚出土資料は千代肇氏所蔵の資料と東京大学理学部人類学教室所蔵の資料が報告されている(図9-5, 図18-6～8)。なお図18-7・8は佐藤が「型式Ⅱのうち開窩を有するもの」として分類し、その適否については資料の増加を待つとしていた資料である(佐藤 1954)。7は第2種の柄槽の側壁が破損したもの、8もやはり第2種の未成品とするのが妥当であろう。

恵山貝塚出土資料は能登川コレクションとして報告されている（図10-3～6，図16-1～4，図18-10～18，図19）。このうち銚頭は未成品を含めて33点あり，出土状況などは不明だが少なくとも一部は副葬品であるらしい。鉤の形状の類似から図19-6・10～12の鉤部破片は第2種に分類した。また第4種はみられないことから図19-16も第2種の未成品と考えておく。1983年度の調査でも銚頭の未成品が1点報告されている（図25-4）。

5-2 日本海沿岸の資料

茶津2号洞穴では続縄文期の銚頭として確かなものは6点出土している。うち2点が出土層位不明であるが，報告者が述べているように他の4点と同じ恵山文化期と考えてよいだろう。第4種4点の他に未成品1点と尖頭の鉤部破片1点がある（図20-1・2）。1は双距の未成品であり第2種と第4種の可能性が考えられるが，14.7cmという長さは第4種としては類を見ないので，第2種の未成品である可能性が高い。1・2両者の存在からこの遺跡における尖頭の第2種の存在を推測できる。一方南に位置する茶津4号洞窟では第11層から第4種が1点出土している。

貝取潤2洞窟では1990～94年度に北海道開拓記念館による調査が行われている。正式報告は未刊だが，1991年度の第二次調査の概報において3点の銚頭が出土したと報告されている。いずれも第2層出土で南川IV群の時期であるという。頭部片側に1段の鉤をもつ第2種1点，双距の第4種1点，未成品1点である。未成品は写真でみる限りどの形態になるものかよく分からない。

入舟遺跡では恵山文化後半の貝塚から7点の第2種銚頭が出土している（図20-3～9）。

なお瀬棚南川遺跡でも3点が銚頭の可能性のある資料として報告されているが，破片であり全体の形状を知るのは困難である（加藤他 1983）。恵山文化期後半の83号ピットから出土した1点は礼文華貝塚出土資料（図18-1）に類似した，距に刻みを入れた第2種の距破片として報告されているが，図を見る限りでは例えば第3種の距破片である可能性も否定できない。

5-3 利尻島・礼文島の資料

利尻島種屯内遺跡では2点の銚頭が副葬品として出土している。第三次調査において1号墓坑から出土した銚頭は，共伴した土器から続縄文時代初頭に位置づけられる（図13-2）。下半を欠損しており窩や距の形態は不明であるが，とりあえず第3種と考えておく。一方2号墓坑からは第1種が1点出土しているが，2号墓坑は上層の魚骨層と同時期のものと考えられており，続縄文時代前半期に属するものとしていいだろう（図17-1）。

礼文島浜中2遺跡ではR地点の調査で続縄文時代の銚頭が出土している。本遺跡の続縄文時代前半の土器は東上泊遺跡と同時期で声間川大曲遺跡よりも古いと位置づけられており，続縄文時代初頭と捉えることができる。銚頭として報告されているのは5点であるが，うち3点を第1種として扱う（図17-2～4）。他の鳥骨製の2点について，報告者は基部の索孔ないし血抜き穴を重視して「あえて鏃とせず銚先に分類」しているが，他遺跡の資料との対比が困難なため本論では扱わ

ないこととする。

礼文島オションナイ遺跡では第3種が1点出土している(図13-4)。「主体部に縄文、頸部に雲様紋及これを畫する爪形紋を施した」土器を伴ったという。オションナイ2遺跡は2000年度に発掘調査されたが、続縄文時代前半期の第1号墓副葬品中に完形の第1種が1点ある(図17-5)³⁹⁾。船泊第一・第二遺跡はどちらも礼文島の浜中地区にあるが、銚頭が1点ずつ採集されている(図13-3, 図17-11)。船泊第一遺跡出土資料は第3種であり、船泊第二遺跡出土資料は後述する東京大学総合研究博物館所蔵資料の第1種と同様の銚頭の2段の鈎部破片だと考えている。

東京大学総合研究博物館所蔵資料中に礼文島出土の鈎引式銚頭6点があるが、筆者はうち1点(図24)を第2種、残り5点(図17-6~10)を第1種だと考えている。このうち2点は既に前田と山浦により紹介されており、両者共これらが刃装着面をもつことから恵山文化との関連を考えていた。オションナイ2遺跡の資料(図17-5)によって続縄文時代前半期に礼文島に刃装着面をもつ第1種があることが確実になり、これらの資料を続縄文時代前半期に位置づける見解を裏付けたといえる。

5-4 太平洋岸東側の資料

油駒遺跡の骨角器は回収された焼骨中から検出されたもので、小片が多く全体形を知りたい。縄文晩期末葉の幣舞・緑ヶ岡式から続縄文初頭のフシココタン下層式の土器が出土している。銚頭として報告されているものは24点あるが、分類不能な破片は除いた(図16-5~14)。ただし除いた中にも刻線による装飾があるものがかかり含まれている。

幣舞遺跡では第3号貝塚からは22点、98号墓の覆土6層中から3点、包含層中からも3点の銚頭が出土している。うち第3号貝塚の第5種未成品1点(図25-2)と98号墓覆土中の第1種2点(図16-15・16)を除いて全て第4種である。土器は幣舞式、緑ヶ岡式、フシココタン下層式、興津式が出土しているという。

下田ノ沢遺跡からは第3種と第4種が1点ずつ出土している。2点とも下田ノ沢I・II式に伴うとしていだろう。

油駒遺跡と幣舞遺跡の資料は共に層位的状況からは縄文晩期後半に遡る可能性を否定できない。また幣舞遺跡の第4種銚頭中のずんぐりした形態の双距のものは、晩期末葉に位置づけられる緑ヶ岡遺跡の銚頭(金子1973)と類似している。しかし幣舞遺跡の第4種には下田ノ沢遺跡の例と類似する距が片側に寄るものが含まれ、また晩期にはみられない第1種が存在する。油駒遺跡においても第1種が多く装飾も豊富である。これらの縄文時代の北海道の銚頭にはみられない要素を考慮すれば、いずれも続縄文時代初頭の資料と考えていだろう。

5-5 続縄文時代後半期の資料

続縄文時代後半期には骨角器の種類豊富さ、装飾の豊かさが失われることが指摘されている

(木村 1983)。銚頭についてもフゴッペ洞窟から1点の第3種銚頭と多数の第4種銚頭(フゴッペ洞窟調査団 1970), K135遺跡4丁目地点Ⅶc層から2点の第4種銚頭が出土している程度である(上野・加藤 1987)。続縄文時代後半期に属する唯一の第3種がフゴッペ洞窟出土の資料である(図14)。

6 考察

6-1 第3種銚頭について

まず最も資料が豊富な噴火湾沿岸の資料を銚頭全体の形態によって2つに分ける。断面形が円形もしくは楕円形を基本とするものをA群とし、腹面が比較的平らで胴部断面形がカマボコ形に近く、距の腹面側も切り落としたような平らな面になっているものをB群とする。

6-1-1 A群

A群に属する資料は図8に示した。距の数は1~3個である。単距の資料は本輪西貝塚と祝津貝塚から1点ずつ出土している。共に尖頭であり、長谷部や渡辺は索孔の方向以外は燕形銚頭に類似すると述べている(長谷部 1926a, 渡辺 1973)。しかし単距である点、背鉤を1つだけ持つ点などは燕形銚頭では一般的ではない特徴である。1は鯨骨製で作りも粗い。2は導索溝と刻線による装飾をもつ。

双距の資料は3遺跡から1点ずつ出土している。腹鉤をもつ4と片側に側鉤をもつ3・5とがある。4は索孔が楕円形、頭部から胴部にかけて側縁の稜が強く発達している。三距の資料も3遺跡から1点ずつ出土している。頭部形態は尖頭のものと同刃装着溝をもつものがある。8は頭部腹面の海綿質が削られており、腹鉤を削ったものと考えられている。6は右側面に導索溝、左側面には側鉤をもつ。2段の腹鉤も続縄文時代では唯一の例である。他にA群に属する資料には本輪西出土の頭部破片2点(9・10)がある。また三距の尾部破片である11・12もA群とみておく。

6-1-2 A群と燕形銚頭の比較

第3種A群銚頭は全て大島のM・Uタイプに含まれるものであり、燕形銚頭により近い特徴を残すと考えられている。だが両者の間には索孔の方向以外にも、導索溝、刻線による装飾、側面観など幾つかの相違点がある。燕形銚頭との比較を行いながらA群の特徴を明らかにしたい。

図8-6は右側面に導索溝、左側面に側鉤をもつが、これは両者が同じ機能を有していたことを示している。つまりどちらも繫索の受ける抵抗を軽減する役割があったと考えられる。ほとんど全てのA群銚頭が導索溝か側鉤を有しており、これは索孔が横方向であることと密接な関係をもつと推測できる。

刻線による装飾はほとんどの資料にみられる。中でも距の腹面側の側縁に連続した刻みを入れる例が多い(3~5・7・8・12)。また索孔上部の2本の平行短刻線も6・8・9に共通する。装

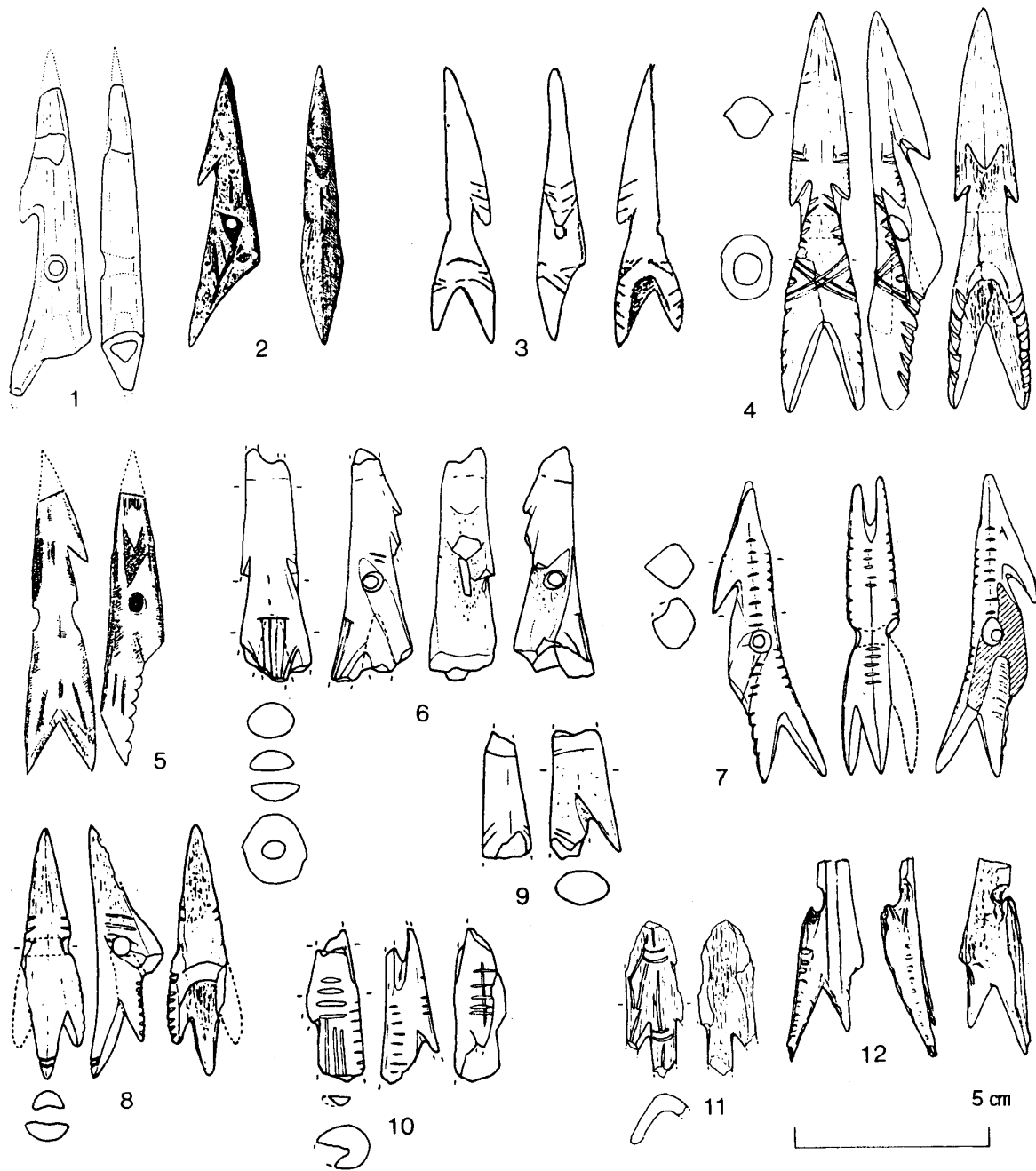


図8 第3種銚頭(1) A群

1・3 祝津貝塚, 2・6・9・10 本輪西貝塚, 4・8・11 南有珠6
5 礼文貝塚, 7 有珠モシリ, 12 小幌洞窟

飾を施す部位は5・6・8では基本的に尾部に限られているのに対して、3では鉤の部分に装飾が施され、4では側鉤から距まで刻みが両側縁上で連続している(ただし刻みの種類は鉤・胴部・距で異なっている)。この3・4には背面に胴部と尾部を画するような横方向の刻線がみられる。7では両側縁と背面中央に平行短刻線列が頭部から距まで連続している。このような刻線による装飾は燕形銚頭においてはほとんどみられず、北海道縄文時代の開窩式銚頭には比較的多いことが指摘

されている（角田 1999）。弥生時代の本州の開窩回転式銚頭にもみられないことから、第4種（開窩式）の影響である可能性が強い。北海道縄文時代の開窩式銚頭および続縄文時代の第4種銚頭においては装飾は主に尾部に施される。開窩式の銚頭では胴部の中央が繫索で覆われるため、装飾が尾部に限られるのは自然である。一方第3種銚頭では器体中央部が繫索に覆われることはないので、胴部・頭部にも装飾を施すようになったと想定することができる。そう考えると、距だけに装飾を施す資料よりも全面に施す資料の方が、また全面に施す資料の中でも区分を持たない資料がより新しい様相であるといえるだろう。

側面観を比較すると、燕形銚頭では距は中心軸より背面側についていて、胴部～尾部の腹面のラインが深くクランク状に折れ曲がるのに対して、A群銚頭では三距・双距のどちらでも両側の距がほぼ中心軸上に位置する。そのため胴部～尾部にかけての腹面のラインが浅いクランク状（5・6・8・12）、浅い「くの字」（3）、なだらかな曲線（4・7）などになるものが多い。これを側面観の直線化として捉えると、なだらかな曲線を描くものがより新しい様相だといえる⁴⁰⁾。

このように考察すると、4と7は頭部まで装飾が施されていて胴部～尾部の腹面側のラインがなだらかなので、A群の中でもより新しいものかもしれない。ただしここでは可能性を指摘するだけに留めておく。

6-1-3 南有珠6VI層段階の設定

第3種A群銚頭が層位的に複数出土している例としては、本輪西貝塚上層と南有珠6遺跡VI層が挙げられる。だが本輪西貝塚上層の資料は先に指摘したように時間幅をもつ可能性がある。南有珠6遺跡VI層出土の第3種銚頭は尾部破片を含めて3点だけであり充分とはいいがたいが、これによって南有珠6VI層段階を仮設する。VI層からは双距（4）と三距（8）の資料が出土しているので、A群銚頭は双距・単距の資料共にこの段階に並行すると考える。ただし有珠モシリ遺跡出土の7については後述する。単距の銚頭の位置づけについても、後述するB群の単距銚頭よりも先行すると考えてやはりこの段階に位置づけておく。

6-1-4 B群

B群にも距の数が1～3個のものがある。しかし単距のもの、刃装着面をもつものがほとんどを占めており、胴部～尾部の腹面のラインが直角に近いくの字に屈曲するプロポーシオンもかなり類似している。そこで主に索孔に注目して分類を行う。

B1群 索孔が円形のもの

B2群 索孔は円形だが、その位置が背面側に寄っているもの

B3群 索孔が扁平な楕円形もしくはアーモンド形のもの

さらに索孔が円形の資料のうち刃装着溝をもつものをB0群とする。

B0群は図9-1が唯一の例である。刃装着溝は横方向、距の数は不明である。

続縄文時代前半期の銚頭の研究

B 1～3 群は刃装着面をもち、単距の場合は距の先端腹面側に突起がある。B 1 群は 3 点あり、いずれも刃装着面は縦方向で側面索孔上部にエラ状の突起をもつ (2～4)。2・4 はほぼ同形状の単距、3 は三距である。3 の索孔はやや楕円形ではあるが、B 3 群ほど扁平ではない。以上の 4 点はいずれも有珠モシリ遺跡貝層出土である。また尾白内貝塚出土の 5 は単距で頭部を欠くが B 0・1 群のいずれかである。

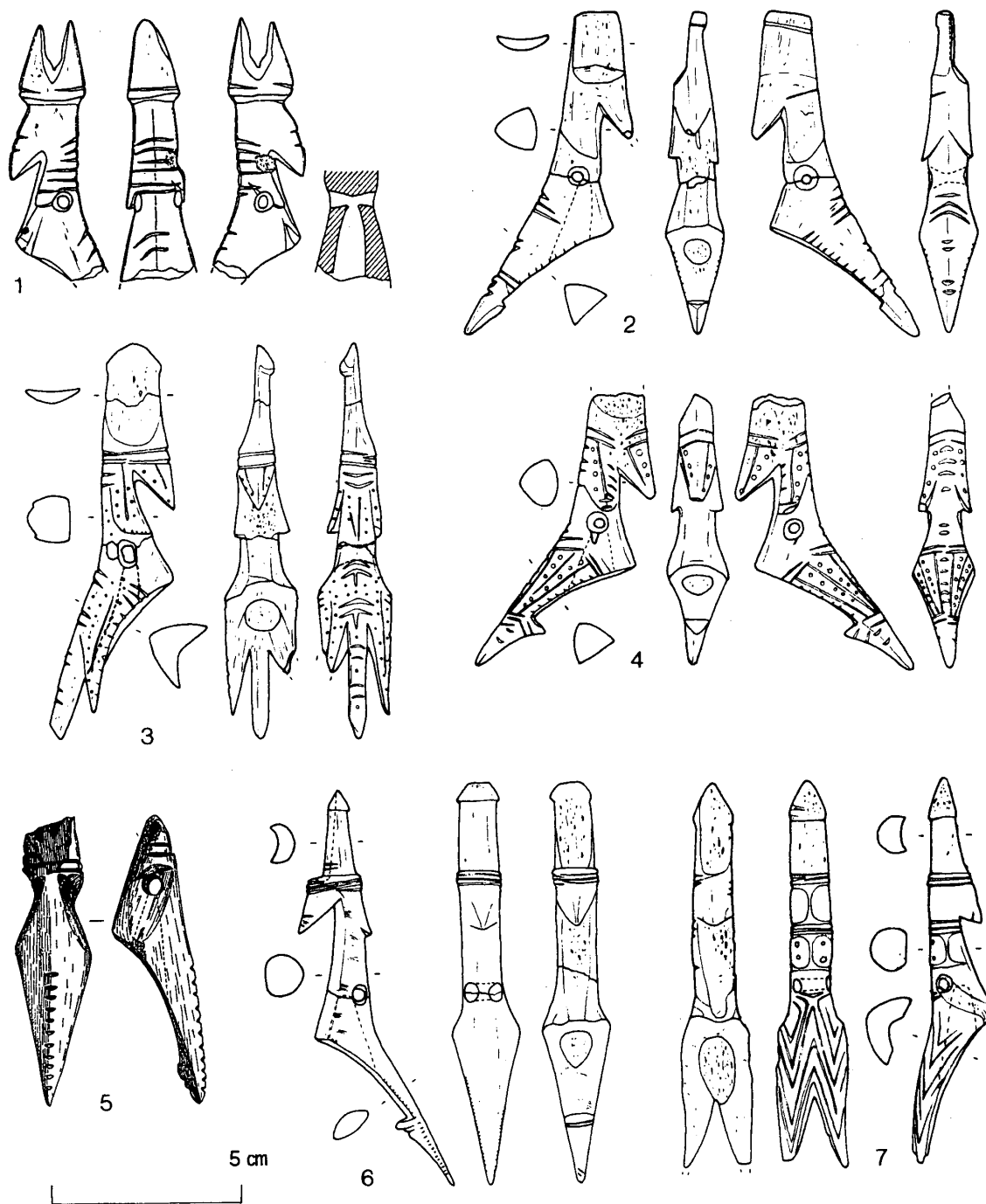


図9 第3種銚頭 (2) B 0 群：1, B 1 群：2～5, B 2 群：6・7
1～4 有珠モシリ, 5 尾白内貝塚, 6 有珠モシリ4号墓, 7 有珠モシリ7号墓

B 2 群は有珠モシリ遺跡から 2 点出土しており、いずれも横方向の刃装着面をもつ（6・7）。6 は単距だが、全体に華奢で特に尾部では顕著である。側面には鉤や突起は一切なく、腹鉤とごく浅い背鉤をもつ。7 は双距だが側面に鉤や突起がない点で 6 に類似している。

B 3 群は有珠モシリ 4 号墓と恵山貝塚にみられ、完形品は 4 点ある（図10- 1～4）。4 は B 群の中で唯一腹鉤を欠き尖頭であるが、本来は他の資料と同様に腹鉤と刃装着面を有していた可能性がある。頭部右側面がやや削られたような痕跡をもつことはこれを裏付けている。他 3 点の刃装着

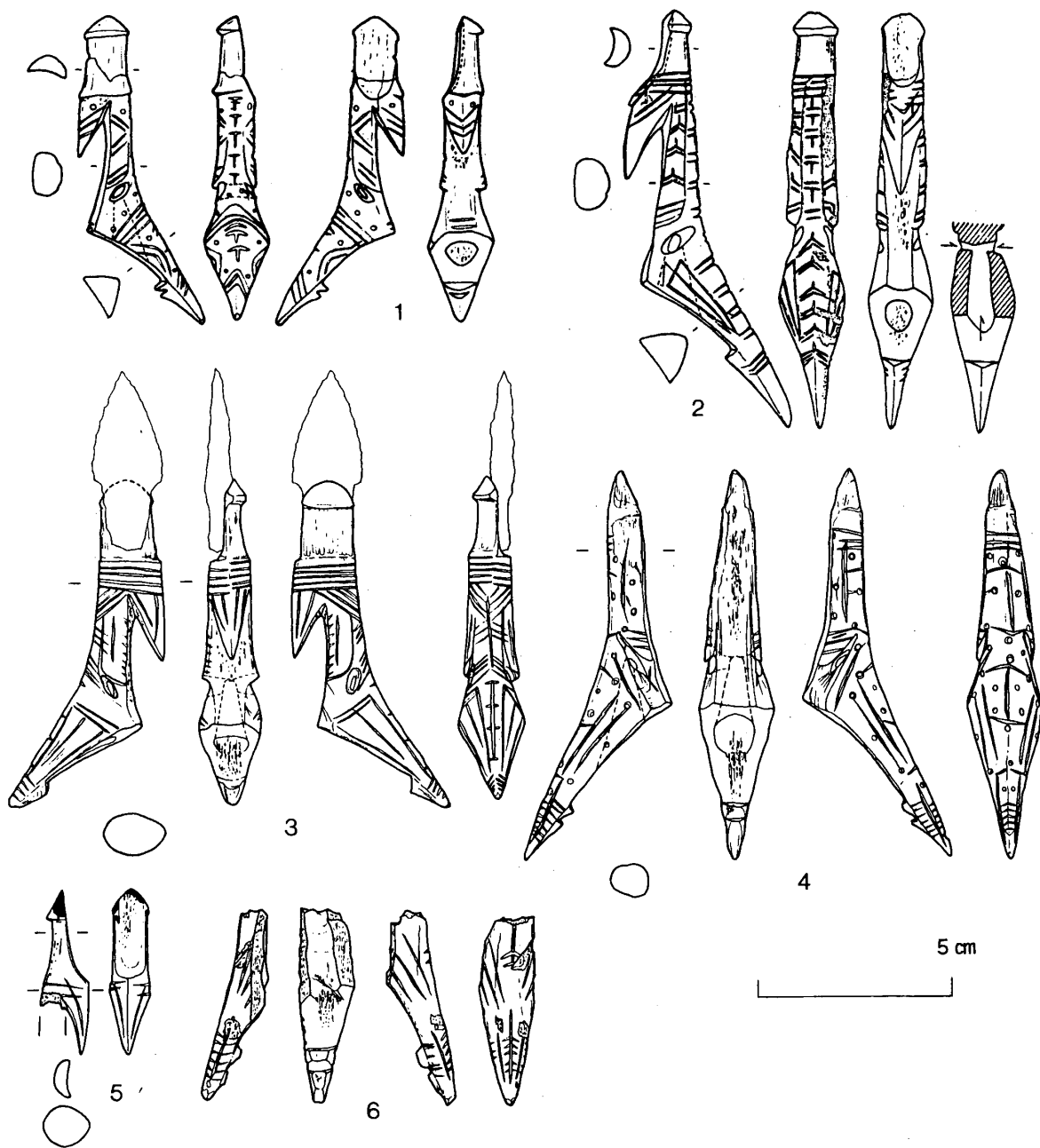


図10 第3種銛頭（3） B 3 群
1・2 有珠モシリ 4 号墓, 3～6 恵山貝塚

面は縦横両方向があり、腹鉤は深く発達している。また索孔の上方の側面は凸帯状に盛り上がっている。距先端の突起は2段になるものがある(1・4)。恵山貝塚出土の頭部と尾部の破片(5・6)もB3群に分類されるものだろう。

装飾について簡単に触れる。主に背面に横方向の刻線を施すだけのものはB0群の図9-1とB1群の2, さらにおそらく5である。2では装飾は索孔より下部に限られ、距の側縁に刻みを連続させている。これはA群にみられる装飾と類似する。B1群のうち3と4の2点は全体に刻線と刻点による装飾を施しているが、距側縁の刻みも含めて非常に似ており、違いは背面稜線上にみられる程度である。B2群の6は装飾がほとんどなく、距側縁に小さな刻みを連続して入れているだけである。7は全面に装飾を施しているが、その内容が他の第3種の装飾とは異なっており、距の部分の刻線などむしろ第2種のものに近い。B3群には刻線と刻点(図10-1・4)ないし刻線のみ(2・3)の装飾がみられる。距側縁の連続した刻みはみられない。T字型・〒字型の刻線(1・2), 距側縁の矢印型の刻線(2・3)なども特徴的である。

6-1-5 有珠モシリ4号墓段階・貝層段階の設定

有珠モシリ遺跡4号墓からはB2群とB3群が計3点出土している(図9-6, 図10-1・2)。これによって有珠モシリ4号墓段階を設定する。恵山貝塚出土のB3群, 有珠モシリ7号墓出土のB2群もこの段階に位置づける。

一方B0・B1群のうち有珠モシリ遺跡出土の4点はいずれも貝層出土である。この出土層位がどの程度の時間幅をもつかの検討は本報告を待つ必要があるが、特にB1群の3点(図9-2~4)にみられる型式学的なまとまりを重視して、有珠モシリ貝層段階を仮設したい。尾白内貝塚のB1群もこの段階に位置づけられる。やはり貝層出土のB0群(図9-1)は刃装着溝を有するが、他の部分については余り差を見出せない。また有珠モシリ遺跡からはA群の中でも新しい様相をもつと考えた図8-7も出土している。これらも有珠モシリ貝層段階に位置づけておこう。

6-1-6 第3種銚頭の変遷過程

南有珠6VI層段階, 有珠モシリ貝層段階, 有珠モシリ4号墓段階の三段階を設定した。図11に変遷過程を示し、表3に属性の変化をまとめた。個々の属性の変化の順序はこれまで考えられてきたものと大きく変わるものではない。だが各段階に距の数が異なる例が存在し、尖頭のものが有珠モシリ4号墓段階にもみられる。従って距の数, 頭部形態による分類だけでは変遷過程を捉えきれない。もちろん単距の例が増加傾向にあり、刃装着溝が刃装着面に変化するということを否定するわけではない。またなお細分の余地を残していることも明らかである。

土器編年との対比が可能な資料は少ないが、南有珠6VI層を南川Ⅲ群, 礼文華貝塚墳墓を南川Ⅳ群の時期に位置付けた。後述するように礼文華貝塚墳墓の第2種銚頭は有珠モシリ4号墓段階かそれより新しいと考えられるので、ここで考えた変遷過程は恵山文化後半期に相当する。

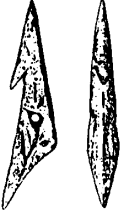
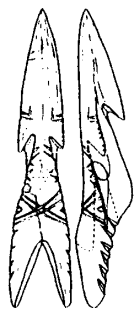
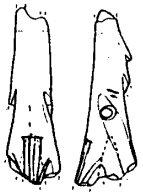
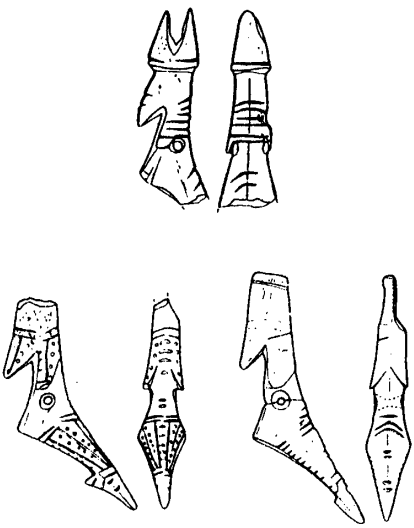
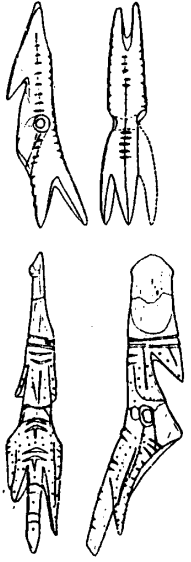
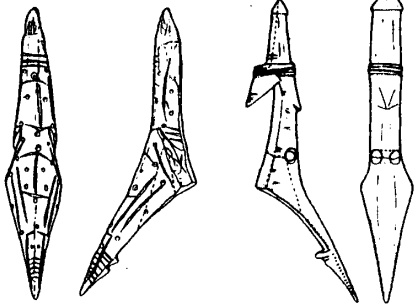
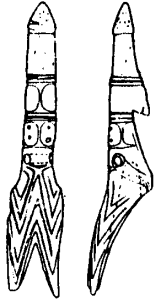
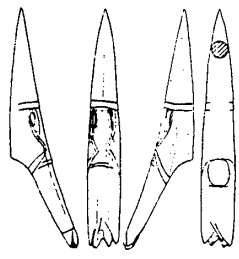
	单距	双距	三距
南有珠6VI層段階			
有珠モシリ貝層段階			
有珠モシリ 4号墓段階			
続縄文時代後半期			

図11 第3種銚頭の編年

S = 1/3

表3 第3種銚頭の属性の変化

	胴部断面形	刃装着方法	索孔	側面の突起
南有珠6VI層段階	円形 楕円形	刃装着溝	円形 楕円形	鉤状
有珠モシリ貝層段階	カマボコ形	刃装着溝 刃装着面	円形 楕円形	エラ状
有珠モシリ4号墓段階	カマボコ形	刃装着面	背面寄りの円形 扁平な楕円形 アーモンド形	凸帯状

(刃装着方法及び側面の突起の属性は刃ないし突起を有するものについてである)

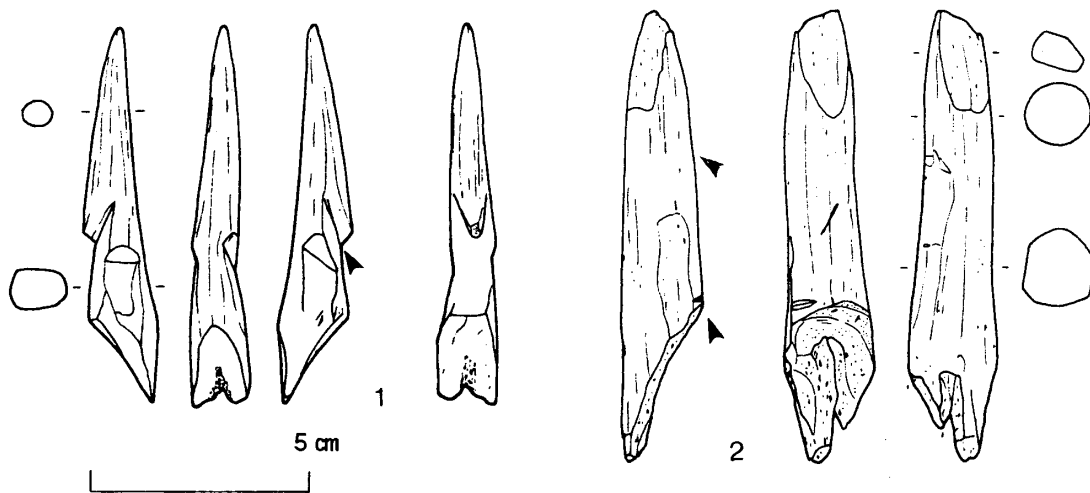


図12 第3種銚頭(4) 未成品

1 有珠善光寺, 2 有珠モシリ

それぞれの属性の変化について簡単に考察する。まずA群とB群の間の違い、すなわち胴部断面形の違いについてである。図12に第3種銚頭の未成品を示した。1は明らかに図8-4のような完成品を目指したA群の未成品である。鹿角の先端部を利用している。この後両側から抉った部分に索孔を穿ち、矢印方向に切り込んで腹鉤を作るのだろう。一方2は有珠モシリ遺跡出土の第3種銚頭の未成品。やはり鹿角製でおそらく双距の片側が折れたために捨てられたものである。この段階ではA群B群のいずれになるのか分からないが、ここからB群を作るとすれば矢印方向に切り込んで腹鉤を切り出すことが考えられる。つまりB群においても腹鉤を作るまで腹面は平坦ではなく、腹鉤を作り出す工程において平坦面が形成される。このことはB群でも頭部断面形は楕円形であることから裏付けられる。このようにA群とB群の胴部断面形の違いは腹鉤の製作工程上の違いであると考えられる。またこれがB群において腹鉤が発達していることと関連することは明らかだろう。そしてB群の距腹面側が切り落とされたような平面になっていることを考え

合わせると、その背景には金属器による製作技術の発達を想定することができる⁴¹⁾。もちろんA群の製作にも金属器は使用されただろうが、より金属器の特長を活かした製作技術が用いられるようになったと考えられるのである。

燕形銚頭と第3種では索孔の方向が異なるが、これは繫索の装着方法⁴²⁾が異なることを示している。縄文時代から弥生・続縄文時代にかけての索孔の方向転換は繫索がループ状に装着されるようになったことに伴うものだと考えることができる。

さてこの変化は二つの側面で捉えることができる。一つ目は銚頭の索孔部分での破損という問題である。楠本は索孔の方向が縦方向であることについて、鹿角の緻密質の表面に近い部分を多く通して破損を防ぐためであると考え（楠本 1973）、山浦はさらに結び目を作って留めることにより張力を索孔の周辺に分散させたと考えた（山浦 1980b）。第3種銚頭では索孔は横方向に、繫索の通し方はループ状になり、この種の工夫は失われてしまうが、山浦は背面近くに索孔を穿つことを鹿角の緻密質部分を通すための工夫だと考えた。そうだとすれば、有珠モシリ4号墓段階に至って破損防止の工夫が再びみられることになる。

二つ目は繫索が受ける抵抗の問題である。燕形銚頭では腹鉤が繫索の受ける抵抗を軽減していたと考えられる。これに対して第4種銚頭では索孔の方向転換に伴って導索溝や側鉤が発達したと考えた。しかし側面の突起については表3に明らかなように退縮傾向を看取することができるし、導索溝も明確ではなくなる。結局このような繫索の受ける抵抗を軽減する工夫はあまりみられなくなるらしい。

索孔の形状の変化は、当然製作技術の変化を伴うものだろうが、なぜそのような変化が起こったのかは分からない。また刃装着方法の変化は、後述するように利尻島・礼文島において刃装着面をもつ例が多くみられることから、その伝播の結果とも考えられる。ただしその場合は利尻島・礼文島では第1種に刃装着面が作られるのに噴火湾沿岸では第1種は全て尖頭であることをどう考えるかが問題となる。

6-1-7 各地出土の第3種銚頭

図13は噴火湾沿岸～渡島半島地域以外の第3種銚頭である。1は下田ノ沢遺跡出土で道東唯一の例である。三距の尾部破片であり、距側縁に刻みが連続する点など噴火湾沿岸のものによく似ている。利尻島種屯内遺跡出土の2はオホーツク文化の前田C群銚頭に類似した左右に薄い形態の第3種とみるこ

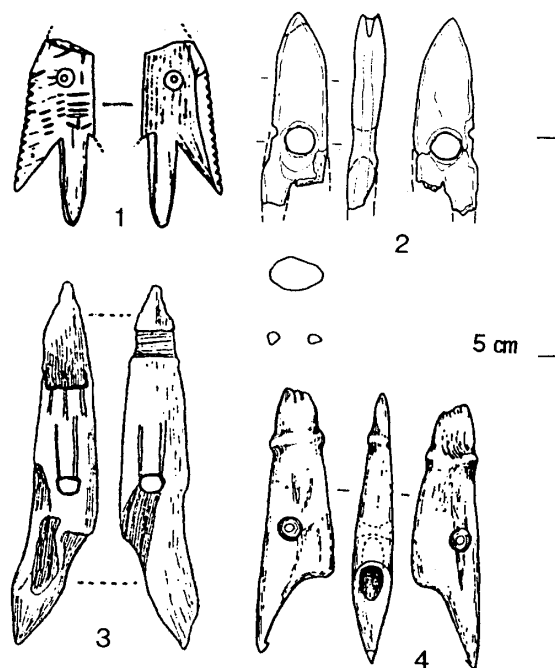


図13 第3種銚頭 (5) 各地出土

- 1 下田ノ沢, 2 種屯内
3 船泊第二, 4 オションナイ

とができるが、第5種である可能性もある。頭部の刃装着溝の幅が狭く、索孔が大きいことも特徴である。ただし溝の深さが一定ではないことから、加工途中である可能性も指摘されている。3と4は共に礼文島出土の第3種である。共に胴部断面形ではA群に分類されるが、刃装着面を持っている点が噴火湾沿岸のA群とは異なっている。いずれも腹鉤をもっていないため、単純に噴火湾沿岸のA群に並行するとはいえない。4は背面に寄る索孔、距の先端の突起を考慮するとB2群との関連が考えられる。一方3にみられるはっきりした導索溝はA群と関連しそうである。

6-1-8 続縄文時代後半期の第3種銚頭

ここで続縄文時代後半期に位置づけられるフゴッペ洞窟の第3種銚頭(図14)について述べておく。側面の突起が全くみられず、索孔がアーモンド形で背面に寄っているなど、続縄文時代前半期における変化の延長上に位置づけられる。胴部断面形はおそらく円形に近いが、これは腹鉤が無いことと関係があるだろう。距末端に抉りが3箇所入っているが、これは距の分岐が浅くなり痕跡的になったものと考えられる⁴³⁾。装飾については刻線の彫りが浅く繊細であることが木村によって指摘されている(木村 1983)。

6-2 第1種銚頭について

第1種銚頭はかつては恵山貝塚の例しか知られておらず、特殊な形態とされたこともあったが(木村 1983)、有珠モシリ遺跡において多くの資料が得られ、広く使われていたことが認識されるようになった(大島 1988a)。さらに最近道北・道東の資料が追加され、かなり広く分布することが判明している(図7)。図15~17に示した。有珠モシリ遺跡、恵山貝塚の資料は2~4段の鉤をもち、装飾を施すものも多く、全て尖頭である。この両遺跡以外の資料は破片が多く、鉤の段数などはよく分からない。索孔をもつ資料がほとんどだが、恵山貝塚に索肩の例(図16-3)がある。この例は鉤が非対称につく点でも特異である。索孔の形は円形の他に楕円形の例が有珠モシリ遺跡にある(図15-3・4・8・9)。第3種銚頭での傾向から類推すると楕円形のものが後出とも考えられるが、4号墓では円形のものと共に伴している。

6-2-1 柄装着方法の検討

図示した資料全てで茎の部分が扁平な板状になっている。索孔付近か少し下部で幅が最大になるが、このために索孔の上部で両側縁が下広がりになっている。第2種銚頭では両側縁は平行で索孔の付近でも扁平にならず、このため索孔から下を欠く資料でも分類可能である。板状の茎の厚みも索孔から下で薄くなるものが多い。茎の

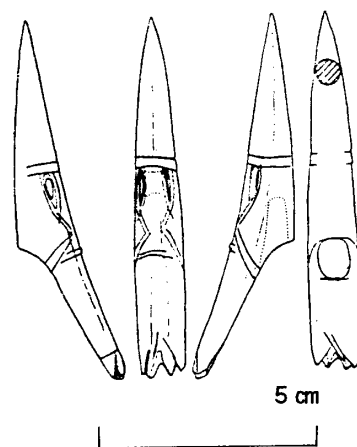


図14 続縄文時代後半期の第3種銚頭
(フゴッペ洞窟)

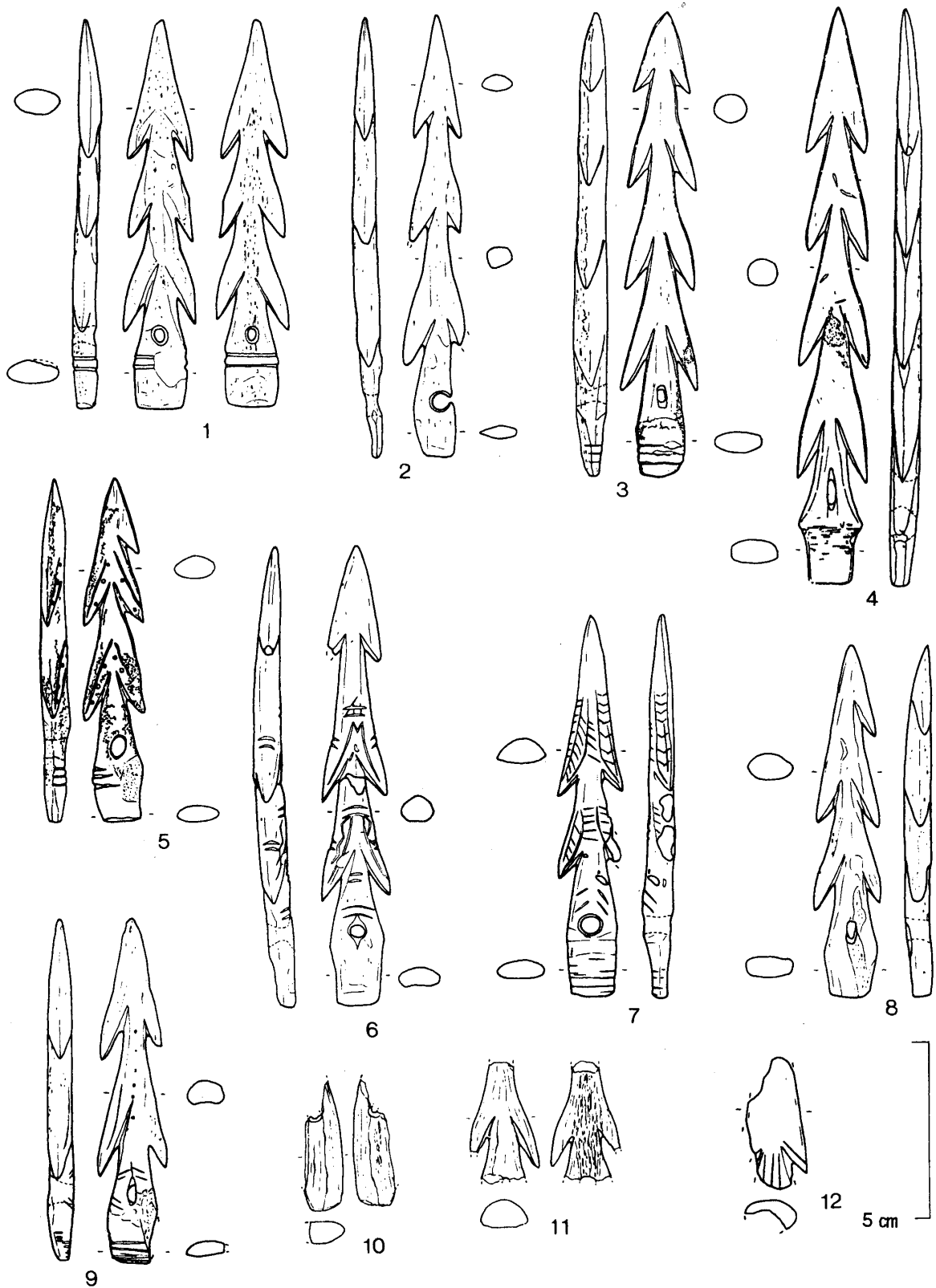


図15 第1種鉞頭 (1) 噴火湾沿岸
 1~5・7~9 有珠モシリ4号墓, 6 有珠モシリ
 10・11 南有珠6, 12 本輪西貝塚

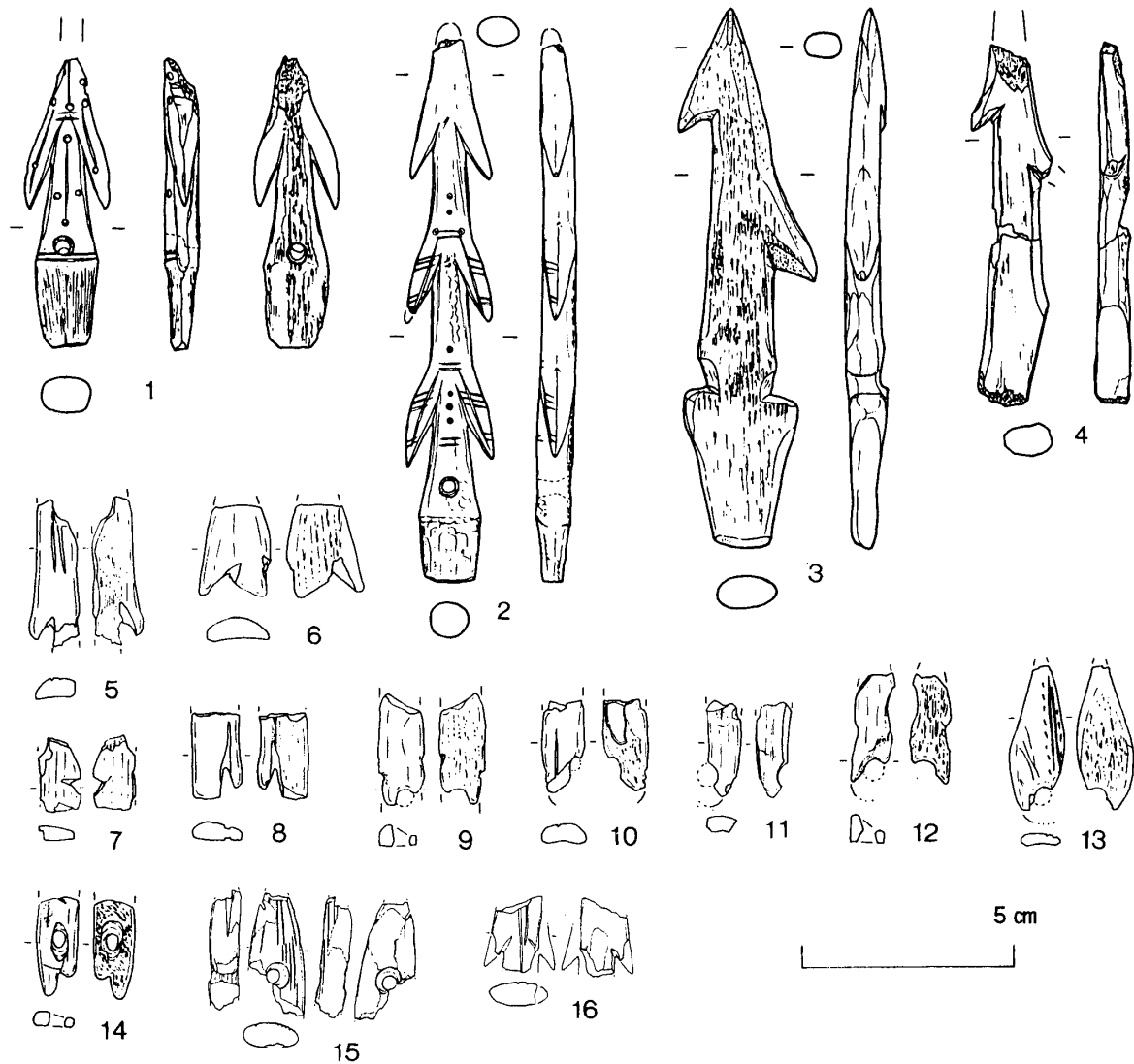


図16 第1種銚頭 (2)

1~4 恵山貝塚, 5~14 油駒, 15・16 幣舞

形状は縄文時代本州の雄形銚頭では棒状・円錐状になるのが通例であり、対応する柄先端は盲孔状のソケットであることが通常想定されている。第1種においては多くの資料の茎に刻線があるが、この部分は柄を装着すれば隠れる部分であり、装飾であるとは考えにくい。浜中2遺跡の図17-4の基部に見られる刻みは着柄時のストッパーないし滑り止めを意図して刻まれたものである可能性が考えられている（佐藤 2000）が、他の資料についても同じことがいえる。これらの刻線は多くの場合片面のみにあるが、これは盲孔状のソケットでは説明がつかないことから、第1種銚頭の場合は茎に柄先端を沿わせて固定するような方法が採られた可能性が強い。もちろん柄の先端部には、盲孔状のソケットではないにせよ、刺突の際に柄から銚頭へと力を伝えるための何らかの加工が施されていたであろう。

6-2-2 利尻島・礼文島・道東の資料について

種屯内遺跡から出土した図17-1は作りが粗く、実用性に疑問がもたれている。索孔も縦2孔で特異である。浜中2遺跡出土の図17-2・4は索孔の位置が中心軸からずれている。また4の鉤は非常に浅い。3は海獣骨製。

オションナイ2遺跡から出土した図17-5は1段の鉤と刃装着面をもち、鉤の部分では背面側が凹むような断面形である。前述したようにこの資料によって東京大学総合研究博物館所蔵資料（図17-6～10）が続縄文時代前半期に位置づけられる可能性が高くなった。6は刃装着面をもち、表面中央に向かい合う三角形の刻みを交互に連続させて波状の文様を作っている。2段目の鉤の上部にわずかな隆起帯があり、この結果平面形態では鉤の両側縁にやや段をもつ。8は刃装着面をもつ第1種で唯一ほぼ完形である。山浦が指摘するように表面中央部に鉤を2つ作っている点の特異である。7と9はいずれも頭部を欠く第1種であるが、鉤から折損部分までがある程度長いにも関わらずまだ太いことから、もう1段以上鉤があった可能性が強い。7は表面中央に刻線があり、また鉤の部分の断面形はくの字状でオションナイ2の例に近い。7は鉤上部にわずかな隆起帯をもち、9はもたないが、いずれも両側縁にわずかな段がある。10は鉤部破片であるが、やはり鉤上部の両側縁にわずかな段がみられる。11は船泊第二遺跡採集品で、2段の鉤をもつが先端と下半を欠く。実測図で2段目の鉤の上部に描かれている横線が6や7の隆起帯と同様のものかもしれないと考え、第1種に分類しておいた。

幣舞遺跡と油駒遺跡出土の資料は破片ばかりで全体の形状は分からない。

6-2-3 第3種銛頭との対比

道東と道北で続縄文時代初頭の段階の資料がみられることから、この時期に既にかかなり広範囲に分布していた可能性が高い。南有珠6の資料から噴火湾沿岸でも南有珠6 VI層段階には確実に存在する。有珠モシリ遺跡や恵山貝塚の例は有珠モシリ4号墓段階に位置づけられるが、同時期の第2種や第3種と共通する装飾を施している。そして続縄文時代初頭またはその可能性がある遺跡で、閉窩式の銛頭を確実に伴う例がないことから、第1種の出現が第3種に先行していた可能性がある。第1種が東北地方の鉤引式銛頭に由来するとすれば、これだけが先行して伝播したことになる。従って別の地域からの伝播の可能性も考慮する必要がある。

6-2-4 刃装着面について

種屯内遺跡出土の図17-1は頭部先端裏側に小さな平坦面を作り、この部分に石鏃が添えられた状態で出土した（種屯内遺跡調査団 2000）。これは刃装着面の原型とも考えられる形態である。第1種は第3種に比較して器体が扁平であり、刃の方向は器体断面の長軸方向に合わせたほうが傷口に銛頭が入りやすいと考えられる。だがこの方向に刃装着溝を作ること⁴⁴⁾は溝の両側壁が薄くなることを意味し、溝の破損を招きやすくなる。そのために刃装着溝ではなく刃装着面が発達したとい

続縄文時代前半期の銚頭の研究

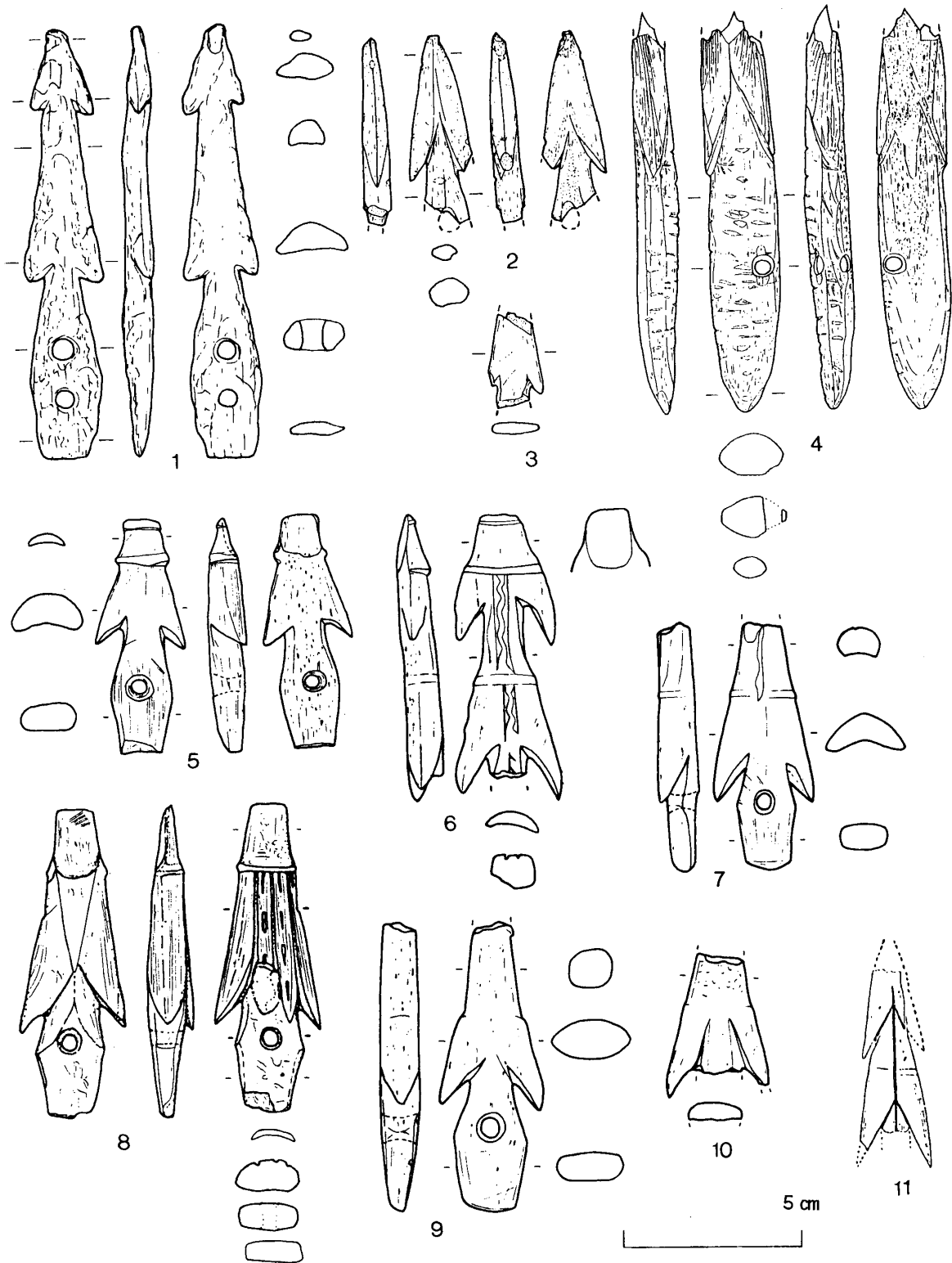


図17 第1種銚頭 (3) 利尻島・礼文島

1 種屯内, 2~4 浜中2, 5 オシヨンナイ2, 6~10 礼文島, 11 船泊第一

うことは十分に考えられる。そしてこの資料が縄文時代初頭に遡る可能性があること、礼文島において刃装着面をもつ例が多いことは、刃装着面の発達が利尻島・礼文島地域において先行した可能性を示唆する。もっとも第3種についての考察で述べたように、解決すべき問題点は多い。

6-3 第2種銛頭について

第2種銛頭は頭部形態によって、尖頭のA群と刃装着面をもつB群に分けることができる。図18～24に示した。

6-3-1 A群

A群銛頭は8遺跡から出土している。大島は「(鉤の段数の違いは)本来多段に作られていた鏝が欠損するごとに再加工が施され、減少していった場合が多く、基本的には3～4段の鏝⁴⁵⁾をもった形式としてつくられた」と述べて頭部再加工によるリダクションを考え(大島 1988a), 前田も同様の見方をしている(前田 2000)。頭部に再加工の痕跡を残す資料、特に図18-1・9のように鉤の痕跡を残す資料の存在から、再加工による鉤の段数の減少があったことは確かだろう。しかしこれが直ちに本来の鉤の段数が2～3段であったことを示すものではない。図18-5・7のような資料は最初から片側1段の鉤をもつものとして作られる場合があることを示している。またA群には距・窩の部分に破損している例が多い。もともとこの部分は刺突・離頭・抵抗の際に大きな力を受ける。また特に第2種銛頭では窩の背腹面側壁が非常に薄い例が多く、さらに板状にした鹿角から作る場合裏面に海綿質がくることになり、構造が弱くなっている。この部分が弱いことは窩の破損だけではなく必然的に距の破損をも生じやすくする。このように窩・距での破損の頻度が高かったであろうことを考えると、再加工による鉤の段数の大幅な減少は考えにくく、せいぜい1段程度とみておくべきだろう。3段の鉤をもつ例は礼文華貝塚墳墓と有珠モシリ遺跡だけで出土しており、むしろ特殊な例である可能性も考えられる。

装飾のある例は少ないが、有珠モシリ4号墓出土の図22-7では全面に刻点を施し、礼文華貝塚の図18-1では距の側縁に連続した刻みを入れている。

南有珠6遺跡出土の図18-4は三距の第3種銛頭の尾部破片として報告されている。しかし距先端から索孔までの長さは第3種銛頭とするには小さすぎ、第2種銛頭の片側距の破片だろう。

6-3-2 B群

後述する礼文島の資料を除くと礼文華貝塚墳墓と有珠モシリ遺跡からしか出土していない。基本的に1段の鉤をもち、刃装着面は横方向、索孔は縦方向である。刻線・刻点による装飾を鉤、胴部表面、距などに施す例が多く、裏面にも施すものもある。A群と比べて窩・距が破損した例が少ないことは、これらが副葬品として特に作られていた可能性を示唆している。

形態による細分は難しいが、装飾については非常に類似した文様をもつものが何組もあり、細分・

続縄文時代前半期の銚頭の研究

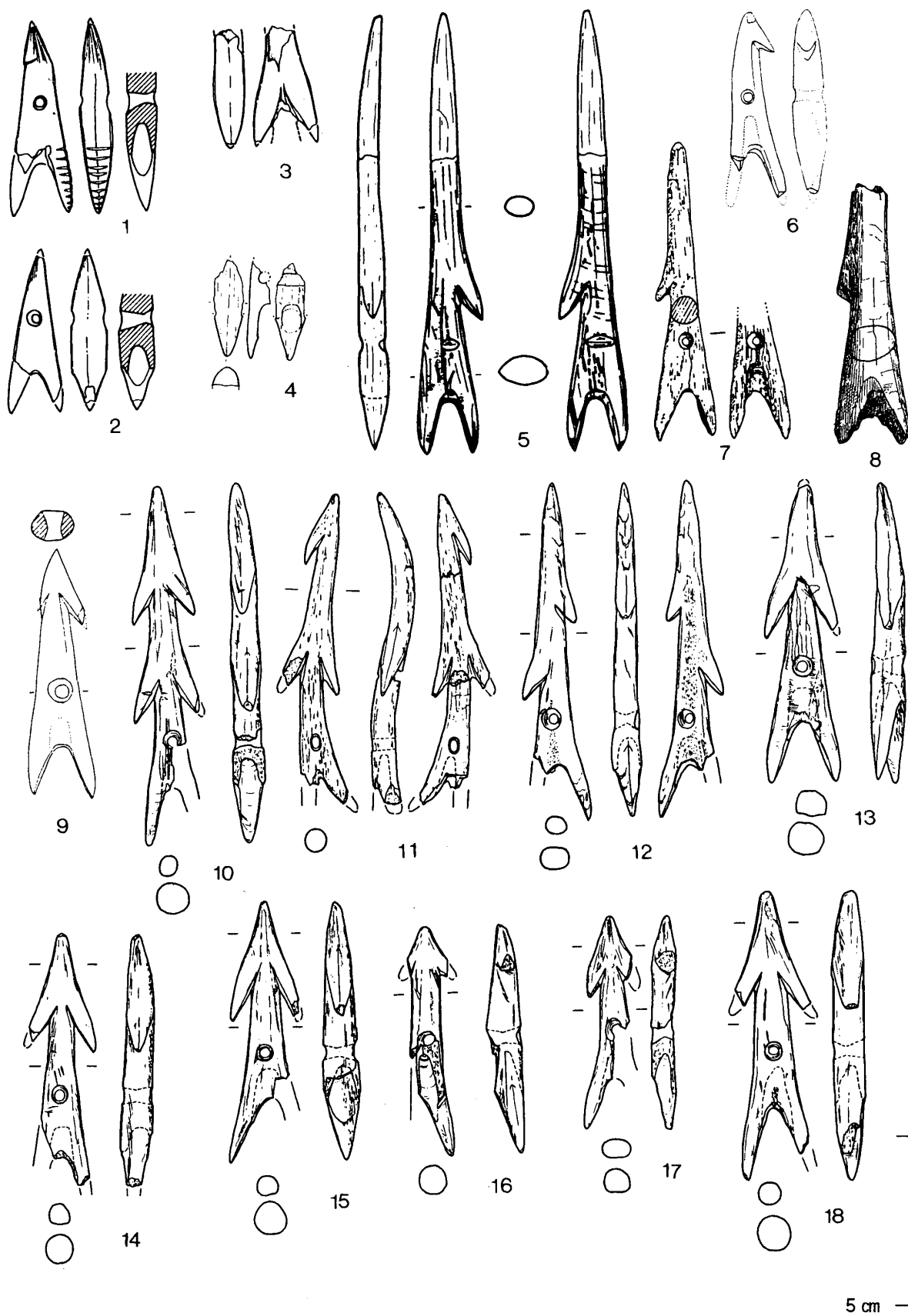


図18 第2種銚頭(1) A群
 1~3 礼文華貝塚, 4 南有珠6, 5 南有珠7, 6~8 尾白内貝塚
 9 祝津貝塚, 10~18 恵山貝塚

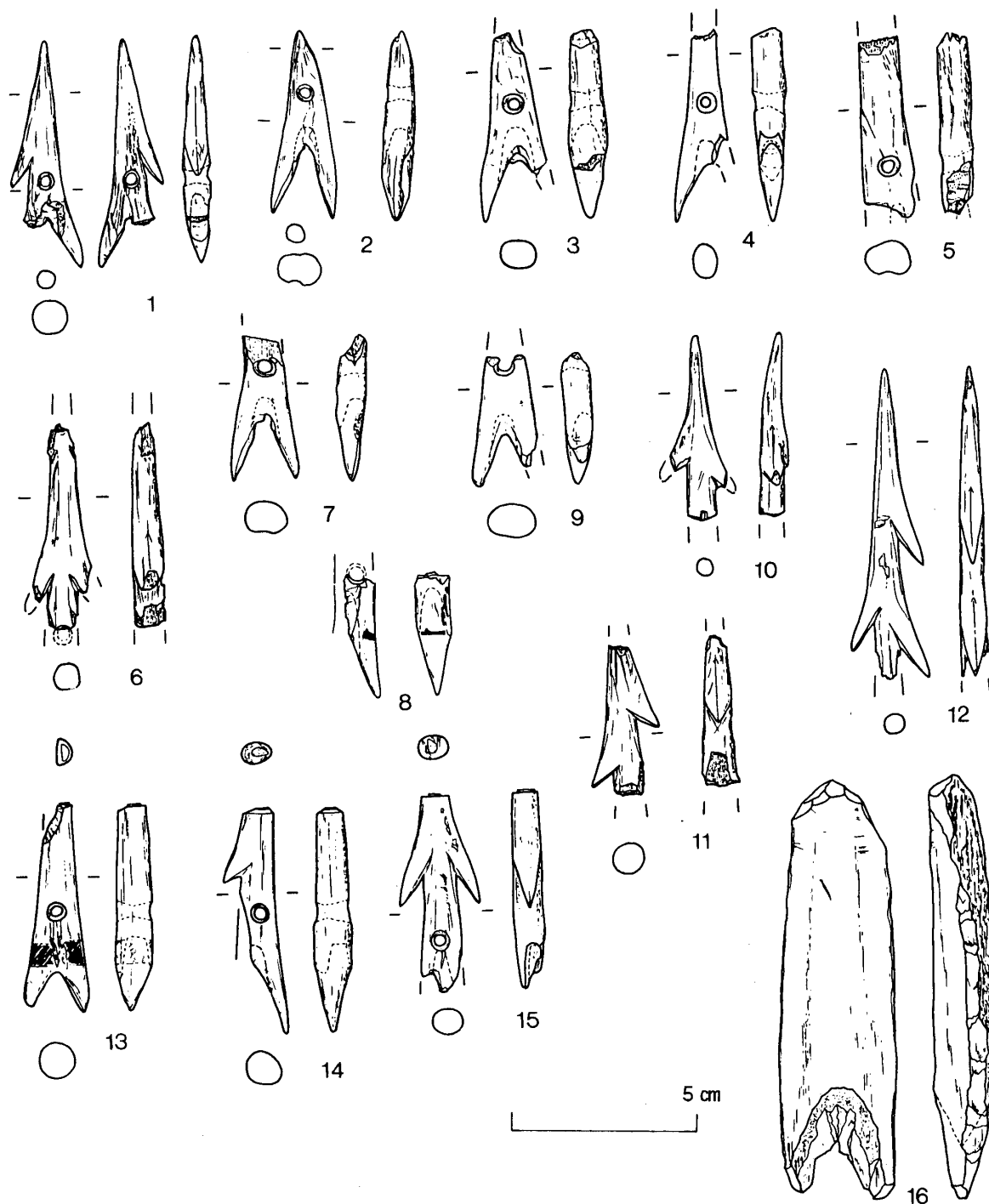


図19 第2種鉾頭(2) A群
1~16 恵山貝塚

編年が可能かもしれない。だが他の形態の鉾頭や他の器種の骨角器の文様なども視野に入れて行う必要があり、本論では幾つかの点を指摘するだけに留めておく。有珠モシリ9号墓出土の図23-5・6は鉤の表面の同心円・渦巻状の文様、裏面の刻点の形状など非常によく似ている。また16号墓出土の8・9は共に鯨骨製であり、太い刻線による装飾も類似している。第3種鉾頭では距のみに装

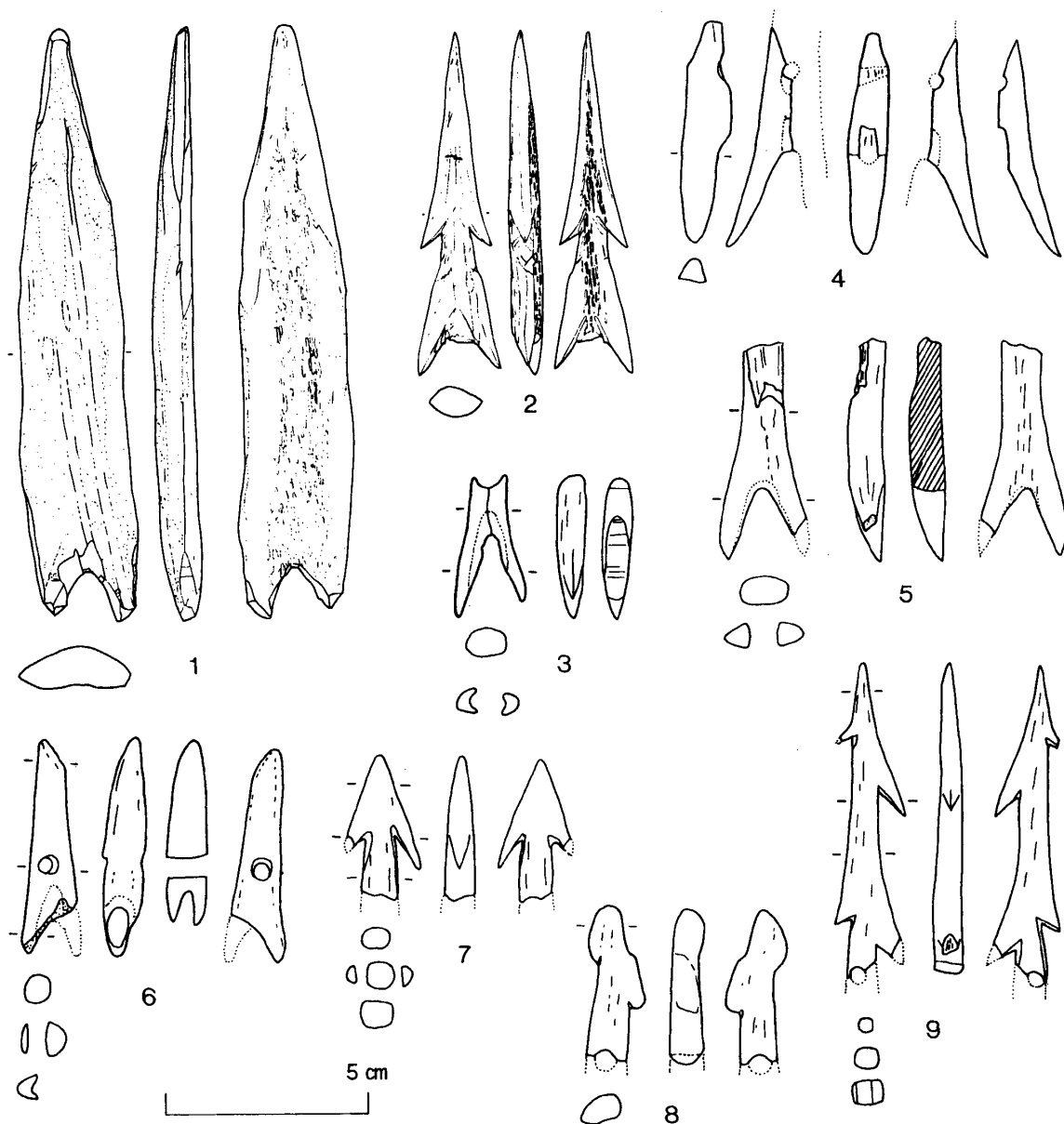


図20 第2種銚頭(3) A群
1・2 茶津2号洞穴, 3~9 入舟

飾を施すものを古く、胴部・頭部にも施すものを新しく位置づけたが、第2種銚頭についても距に装飾を施すのは古い要素であると考えられる。礼文華貝塚墳墓の資料(図21)には距に装飾を施したものがなく、同遺跡の貝塚や有珠モシリ遺跡4号墓のものと比較して新しい可能性がある。

ところで図24は礼文島出土の資料で索孔より下を欠くが、刃装着面を持ち表面中央に太い縦の刻線が施されている。鉤の両側縁はなめらかな曲線を描き、段を持たない点で第1種とした他の礼文島出土の鉤引式銚頭(図17-6~10)と異なっている。またこの資料では索孔の上部での両側縁がほぼ平行であるが、前述したように第1種では両側縁が下に広がるから、これは第2種である可能性が高い。刃装着面をもつことからB群に分類されるものだが、2段の鉤をもっていることになる。

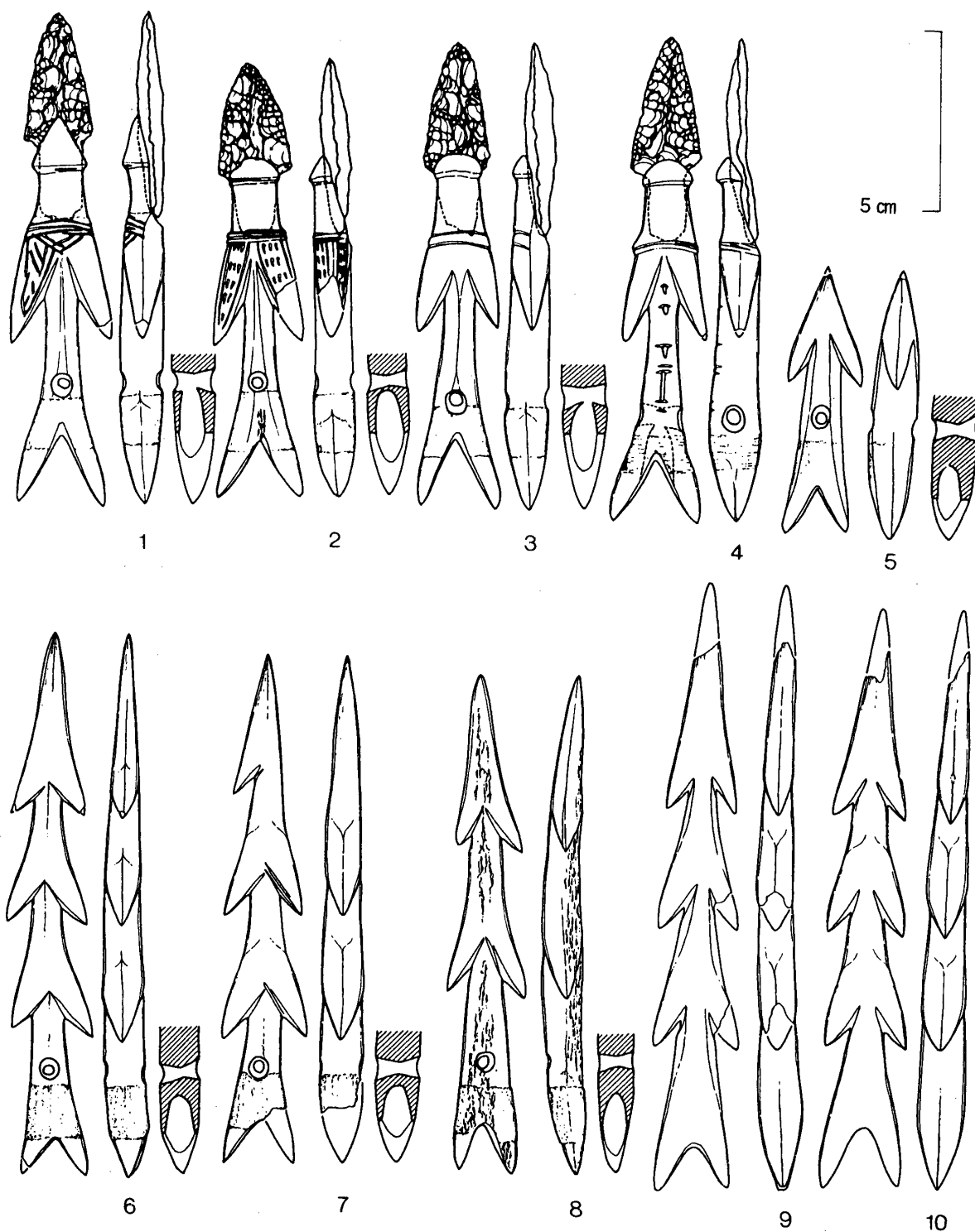


図21 第2種銚頭(4) A群・B群
1~10 礼文華貝塚墳墓

6-3-3 第2種銚頭の変遷過程

南有珠6遺跡出土の第2種銚頭である図18-4は攪乱出土だが前述したようにVI層と同時期とみなした。この段階の第2種銚頭は他にもある可能性は高いが判断材料を欠くものが多い。礼文華貝

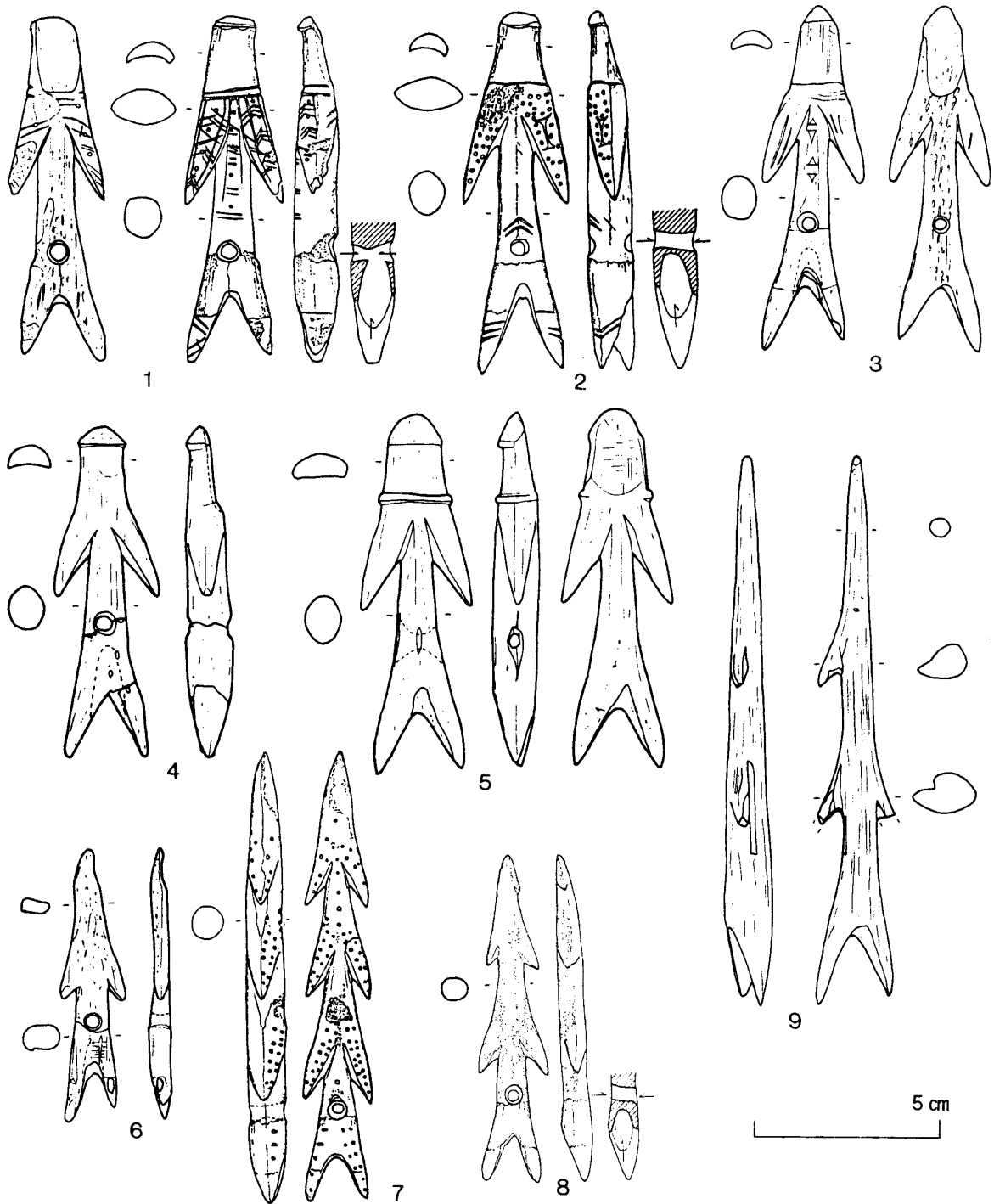


図22 第2種銚頭(5) A群・B群
1~9 有珠モシリ4号墓

塚の貝塚出土の図18-1の距側縁に連続して施された平行短刻線は第3種A群銚頭の装飾に類似しており、並行すると考えておきたい。有珠モシリ4号墓からは図22に示したA群5点・B群4点の計9点の第3種銚頭が出土しているが、当然有珠モシリ4号墓段階とすることができる。

ここで問題になるのはB群の存在がどこまで遡るのかという点である。B群銚頭の分布がA群

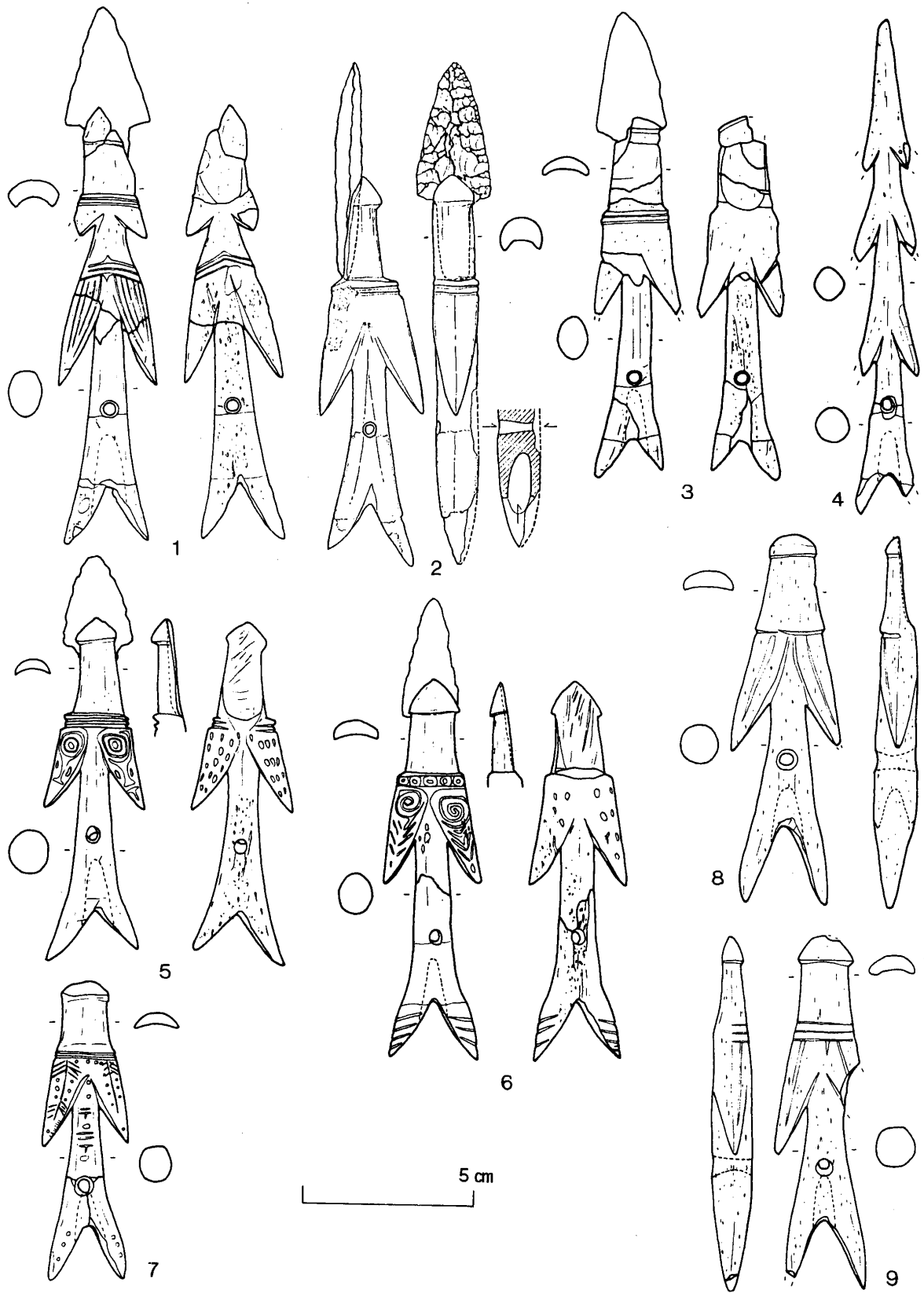


図23 第2種銚頭(6) B群
1~4 有珠モシリ7号墓, 5~7 有珠モシリ9号墓, 8・9 有珠モシリ16号墓

よりも限られていることから、B群はA群に刃装着面を作るようになって生じた形態だと考えられる。第3種銚頭においては刃装着面をもつB1群の出現は有珠モシリ貝層段階であった。第2種銚頭においても刃装着面をもつB群は南有珠6VI層段階には存在しなかったと推測する。一方恵山貝塚では頭部が確認できる第2種銚頭の資料が13点あるが、刃装着面をもつ例はみられない。恵山貝塚の資料の共伴関係は確実ではないが、これらの第2種A群銚頭が第3種B3群銚頭に伴うものならば、第2種B群の出現を有珠モシリ4号墓段階の間とすることができる⁴⁶⁾。

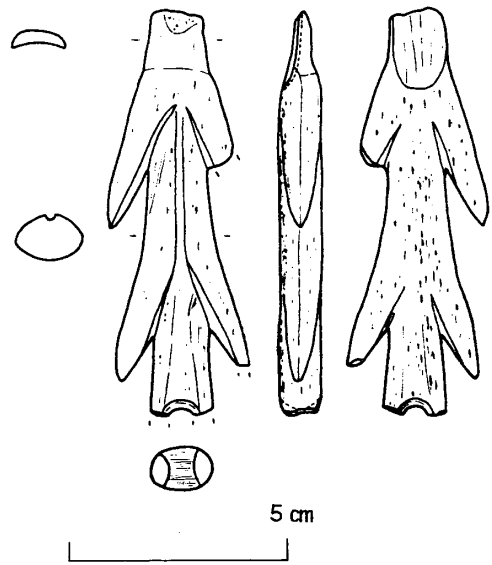


図24 第2種銚頭(7) 礼文島出土

6-3-4 第2種銚頭の出自の検討

6-3-4-1 山浦説の検討

山浦によれば組み合わせ式双距銚頭の伝播から第2種銚頭の発生に至るまでの変遷は次のような過程を経る(山浦 1999)。

- ①大型化と単式化 大型の鹿角入手が可能になったことによる
- ②索孔の出現 大型化の結果として可能になる
- ③刃と頭部形態の変化 刃の材質、刃の方向、刃の装着方法が変化
- ④鉤の発達 雄形銚頭の影響による

南有珠6VI層段階には既に第2種銚頭が存在するので、それに先行する段階でこれらの変化が生じたはずである。まずこれらの変化を示すような資料の有無を検討する。

①の単式化が起こっていない組み合わせ式の銚頭としては、管見の限り礼文島船泊出土の資料が唯一の報告例である(名取 1933)。時期不明だが続縄文時代のものである可能性も否定できない。対称な二つの部品を組み合わせ「閉窩」の銚頭を作る点、頭部に刃を挟むスリットができる点が原の辻の組み合わせ式双距銚頭と共通する。しかし鯨骨製で長さ22cmと著しく大型である点、尾部が叉状に開かない、つまり明確な距を持たない点、頭部のスリットの幅が4mm~1.5cmと広い点などは原の辻例とも第2種とも似ておらず、両者を繋ぐ資料とは言いがたい。②の索孔が作られない段階の資料も存在しない。索孔のない資料は全て柄槽もない未成品である。続いて③の刃の装着に関わる変化のうち、材質と装着方法については、金属製の刃を装着する例、あるいは刃装着溝をもつような第2種の例はいずれも未発見である。また刃の方向についても山浦が挙げた縦方向の装着面をもつ例(図23-2)は、同じ墓から出土した2段の鉤をもつ例(図23-1)や、有珠モシリ4号墓(図22-5)・礼文華貝塚(図21-4)にある横方向の索孔の例とともに、おそらくは有珠モシリ4号墓段階におけるバリエーションとみなすべきだろう。④の鉤の発達についても、無鉤

の資料は4例と少ないし、また2～3段の鉤を有していたとまではいえないにしても製作当初から無鉤であった可能性は低く、例えば図18-1では明らかに片鉤を削っている。つまり第2種は最初から鉤をもっていた可能性が高い。

以上から①～④の変化の以前ないし過程にあるような資料は今のところ存在しないといえる。それにも関わらず第2種銚頭の祖形を組み合わせ式銚頭に求めるとすれば、これらの変化がほぼ同時かつ短時間に起こったとする必要がある。先にみたように続縄文初頭には第1種銚頭が全道的に普及していたから、②の索孔の出現や④の鉤の発達に第1種が影響を与えたと考えることは不可能ではない（もちろん索孔については第3種の影響を考えてもよい）。しかし刃の装着について考えると、第2種B群銚頭の存在が確認されるのは有珠モシリ4号墓段階以降であり、第2種銚頭はまず尖頭の第2種A群として成立している。従って第2種銚頭が刃を挟み込む原の辻タイプの組み合わせ式銚頭から発達するためには、まず刃の欠落を想定する必要がある。

この原の辻例の組み合わせ式双距銚頭は刃を入れて計3つの部品から成る銚頭である。このような構造の銚頭としては北米北西海岸の先住民の使用したものが知られているが、やはり3つの部品から成り、刃を挟み込むように組み合わせる（佐藤 1954, ヒラリー・スチュアート 1987, 後藤 1992）。山浦は組み合わせることの目的をより大型の銚頭を作るためだと考えたが、それよりも刃を挟み込むために組み合わせ式にしていると理解するのが自然であり、礼文島船泊の例（十分に大きな材料で作られている）もこれを裏付ける。組み合わせ式であることの本質が刃を挟み込むための構造にあるとすれば、大型の鹿角の入手と単式化は結びつかないし、単式化や刃の有無・材質・方向・装着方法の違いの持つ意味もより大きなものになる。つまり山浦の想定したような大型の鹿角の入手を契機としたスムーズな変遷過程は成り立たず、従って短時間での急激な変化を考えるのは困難であろう。

6-3-4-2 前田説の検討

前田の考えは「機能を重視すべき」との方針に拠ったものであり、根拠としては有珠モシリ遺跡の資料における第1種と第2種の鉤の形状・段数の類似を挙げている（前田 2000）。有珠モシリ遺跡の資料は第2種銚頭が成立した時期のものではなく、これらの類似点はこの段階に両者が同様の技術で製作されていたことを示すものであるが、必ずしも系統関係を証明するものではない。だがこれに先行すると考えられる鉤引式の資料は破片がほとんどであり、両者の形状の類似点についてこれ以上論じるのは難しい。そこで前田が挙げた両者の明確な相違点、すなわち柄装着方法と刃の有無について考察し、系統関係を考えることが可能かどうかを探りたい。

まず後者について異なった様相を示す礼文島の資料を除いて考察する。確かに第1種は全て尖頭だが、まず尖頭の第2種A群が成立したと考えれば、第1種と第2種の系統関係は否定されない。なおこの刃の有無は第1種と第2種の担っていた何らかの役割の違いを反映するものである可能性は高いが、刃を装着する第2種B群が全て副葬品であることを考えると、これを性急に獲物の違

いに結びつけるのは危険であろう。

続いて柄装着方法であるが、前田は雄形と雌形を銚に限らない「柄づけ」の技術として捉え、当時の日常生活においては常に両方の技術が存在して状況に応じて選択を行っており、それゆえに一方から他方へ乗り換えるようなことも起こりうると考えた。他の道具において雄形／雌形の両方の技術が存在したとしても、前に述べたような銚頭のセットの互換性を考えたとき、両者の差はやはり大きい。しかしこの互換性が問題になるのは、雄形銚頭だけを持つ集団において雌形銚頭を新しく導入する場合であり、既に雄形と雌形両方の銚頭を使用しているような集団においてはさほど問題にならない。第2種が出現した時期に閉窩式の銚頭が既に存在していたとすれば、第1種を閉窩式にしたとしても新たな銚のセットを必要とするわけではなく、また鉤と窩のそれぞれについては新たな形態も生じていないから、この転換は非常にスムーズに行われうる。続縄文時代初頭には既に第1種が存在し、これと第3種の接触によって第2種が生じたと考えることができる。

これを前田は鉤引式の雄形銚頭（第1種）が抵抗機能をそのままに柄装着方法を雌形閉窩式に転換させたとみた。しかし雌形閉窩式の回転式銚頭（第3種）が抵抗機能を鉤引式に転換させたものだとみることも同様に可能である。この二つはコインの表裏のような関係にあり、両者の相違は抵抗機能と柄装着方法のどちらを重視するかという点に帰着する。どちらが本質的に正しいという問題ではなく、本論ではこれ以上は立ち入らない。第1種銚頭と第3種銚頭の双方を基盤として第2種銚頭が成立したという点を強調しておく。

6-4 第4種・第5種銚頭について

第4種銚頭については本論では考察の対象としていない。渡辺は続縄文時代に「分布も濃密になり出土量も豊かになる」といい（渡辺 1973）、また木村は「道東・道央的な性格」を示すものとしたが（木村 1983）、それほど多くの資料は知られていなかった。墓に副葬されることがほとんどないことも出土点数に影響していると考えられるので、この数がそのまま当時使用されていた銚頭の数で反映しているとみなすことはできない。いずれにしろこの形態が縄文時代の開窩式銚頭の伝統上にあり、擦文時代の開窩式銚頭へと続くものであるという点についてはほぼ見解は一致しているし、特に変更を加える必要もなさそうである。形態としては双距で尖頭のもものが主体である。距が片側に偏った資料が下田ノ沢遺跡、礼文華貝塚、幣舞遺跡で見られるが、この時期に特徴的なものである。

第5種銚頭は図25に示した5点だけで、柄溝と索孔を共に有する資料である。1は祝津貝塚採集の資料であり、器体は左右に薄く中央に横方向の索孔を有し、左側面に細い柄溝、頭部に狭い刃装着溝を作り、縦の刻線で装飾を施している。形態の特異さと狭い刃装着溝、柄溝がややフラスコ状の断面を呈するらしいことなどから、より新しい時代のものではないかという疑念もある。しかし幣舞第3号貝塚から出土した銚頭未成品の2は、このような形態の銚頭が続縄文時代に存在した可能性を支持する。全体・刃装着溝・柄溝の形状において類似するばかりでなく、素材の海綿質のみ

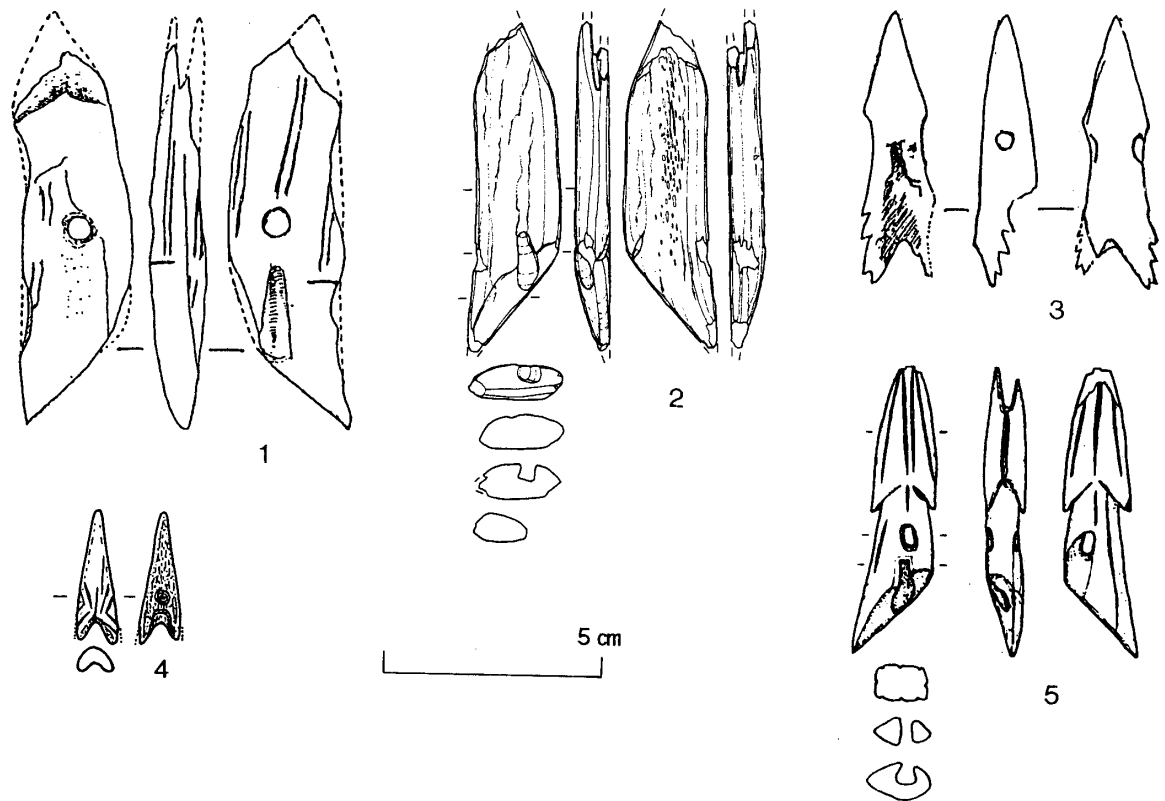


図25 第5種鉬頭

1・3 祝津貝塚, 2 幣舞, 4 恵山貝塚, 5 礼文島

られる面と反対側に柄溝を作っている点においても共通している。もし2がこの後中央に索孔を穿って1のような第5種になるとすれば、祝津と幣舞というかなり離れた遺跡に分布することになる。3は1と同じく祝津貝塚採集で、あるいは第3種とするべきかもしれないが、窩が開いているように見える点を重視した。また4は穿孔途中であるが、背腹面が磨耗していることなどから再加工の途中で捨てられた未成品と推測されている。柄溝をもつことと索孔を穿とうとしていることから、第5種の未成品である。3と4については前2点との共通点はほとんどない。一方5は山浦により紹介されている礼文島出土の鉬頭で時期などは不明だが、第5種鉬頭の一例として掲載した。1・2と同じく柄溝を側面に設けているが、頭部形態などは独特である。このように第5種の資料は非常に少ないが、1と2については同形態である可能性がある。また4は本来どのような形態であったものを再加工しようとしたのか不明だが、この種の鉬頭がいわば臨機応変に作られた可能性を示唆している。第5種は開窩式鉬頭と索孔をもつ鉬頭を両方もっていた続縄文文化において、時々試みられたが主流になることはなかった形態と理解すべきだろう。

7 おわりに

続縄文時代前半期の鉬頭を特にその編年と系統論の側面から考察した。鉬頭の種類に関しては一部で意見の不一致がみられ、それが混乱を招いている部分がある。混乱を解消するには基準を明示

することが重要であると考え、銚頭研究全体を視野に入れた検討と整理を行った。結局続縄文時代前半期の銚頭を5つに分類することができた。北海道の伝統的な銚頭と続縄文時代に伝播した銚頭があり、これらの接触の中から生じた銚頭があることを指摘した。さらに相互の関係はこのような発生段階に留まらず、その後の変化の過程においても装飾や頭部形態などの点で影響しあって複雑な様相を示している。また繫索の装着方法や金属器による加工技術の発達などの技術的な側面もある。本論ではこのような様相の一端を示した。ただし資料面の制約もあり、例えば狩猟対象や狩猟方法といった側面については論じることができなかつたし、骨角器の副葬のもつ意味についても考察することができなかつた。これら機能や行動に関わる面の追及を今後の課題としておきたい。

謝辞

本論執筆にあたっては資料閲覧・文献等で以下の方々、機関にお世話になった。

青野友哉、伊藤典子、内山幸子、大島直行、小島朋夏、佐藤孝雄、佐藤智雄、諏訪 元、西本豊弘、長谷部一弘、福田正宏、藤沢隆史、前田 潮、国立歴史民俗博物館、市立函館博物館、伊達市教育委員会、東京大学総合研究博物館、筑波大学考古学研究室、礼文町教育委員会

(以上五十音順、敬称略)

本論は2000年3月に東京大学大学院に提出した修士論文の一部に加筆修正したものである。宇田川洋先生をはじめとする東京大学考古学研究室の諸先生方には日頃からご指導頂いている。特にこの論文の作成にあたって今村啓爾先生に多大なご教示をうけた。また筆者が北海道の骨角器の研究を始め、曲がりなりにも続けているのは、西本豊弘先生、新美倫子先生のご指導によるところが大きい。これまでににお世話になった方々に感謝するとともに、今後ともご指導をよろしく願いいたします。

註

- 1) 続縄文時代のうち恵山文化におおむね並行する時期とそれに先行する時期を指して用いる。
- 2) 先端部が柄から外れるという点を定義に含めず、固定銚と離頭銚の両者を認める立場もある。
- 3) 英語では harpoonhead、仏語では tête de harpon であり、訳語としてはどちらもありうる。
- 4) 雄形／雌形の分類については後述する。
- 5) なお銚頭の用語において「茎」の使い方に混乱が見られる。例えば茎溝式・茎槽式という場合、雌形銚頭の胴部を指して茎部という。一方茎溝を頭部の鍬を装着する溝を指して用いている例もある。柄に差し込む突起を指して用いるのが正しいと考える。
- 6) 本論でいう柄溝には、ソケット部分の断面形が皿状あるいは「コの字形」で胴部に紐を巻くことによってはじめて柄に装着可能になるものから、断面形が袋状・フラスコ状になっていて紐を巻かなくても柄に装着可能なもの、盲孔の側壁に切れ目をいれただけのものまでが含まれることになる。これではいかにも範囲が広いが、後述する開窩式／閉窩式の分類との対応を重視した。
- 7) 両者は錯誤があったとしてこれらの用語を撤回している（大塚 1976、種市 1998b）。
- 8) end blade の訳である端刃という語が使われることがある（山浦 1980a）。この語は side blade = 側刃と対になるものであるが、側刃を持つ例は日本列島には管見の限り存在しないので、本論では端

／側を区別する必要はないと考えた。

- 9) 両者を、石鏃装着タイプ／石銚装着タイプと区別することがあるが、刃装着面を持つことと石銚を装着することとは先験的には対応しないので、本論では採用しない。
- 10) 英語の spur であり、尾鉤ともいうが、鉤とは区別しておく。
- 11) 英語の barb であり、アゲ、アゲ、カエリ、逆刺、逆鉤、鉤、鉤、鏃などの語が用いられている。後述する回転式／鉤引式の分類に対応させて、鉤と呼ぶことにする。
- 12) もっともこの互換性という点については、例えば同じ雌形である開窩式と閉窩式の場合はどうか、あるいは同じ閉窩式同士ではどうかなども検討する必要がある。
- 13) 雄形も雌形も（柄と銚頭という場所の違いはあるが）ソケットを作ることに注目して両者をまとめてソケット式と呼ぶことにでもすれば、非ソケット式と呼びうる資料である。ただし考古資料では前述したように銚頭に窩が作られないことをもって雄形と分類しているために、非ソケット式も雄形に分類されることになり、あまり意味はないかもしれない。（ここでいう「ソケット式」の内容は、後述する前田の用法とは異なる。）
- 14) 開窩式／閉窩式の分類を含む銚頭の分類に関わる諸問題については種市が詳細に論じており、参考にした（種市 1998b）。
- 15) 前田は1997年にも同じ茎溝式／開窩式の分類を用いている（前田 1997）。
- 16) 種市自身もこれは離頭機能（＝窩の形態）ではなく繫留機能に関わる要素であるとしている（種市 1998b 図式2）。
- 17) この批判は分類の枠組みそのものを否定したのではなく、山浦自身もこの分類を用いることは多い。
- 18) 以下で用いる「恵山型」「南境型」「沼津型」の分類は全て渡辺による（渡辺 1973）。
- 19) 楠本は「後期後半の回転式銚」あるいは「回転銚」という表現を「沼津型」にあたる銚頭を指して用いている。燕形銚頭を指しているのではない点に注意が必要である。
- 20) 実際には抵抗装置の向きが変わることによって抵抗装置にかかる力の大きさ自体も変化するので、距離の変化を考えるだけでは十分ではない。
- 21) 雄形銚頭の回転運動については、山浦がトンプソンの研究を紹介している（山浦 1980a）。それによると「その網孔の位置によっては、雄形銚頭でも獲物体内に完全に刺さった後に、回転式銚頭のような運動を行う場合も見られる」として索孔の位置に注意している。
- 22) 銚頭全体の中でのPの位置を回転効率と表現することがある（木村 1983など）。Pが器体の非常に後方に位置する場合、銚頭を回転させる力が加わったとしても銚頭の前方で受ける抵抗が大きくなって回転しにくい、ということである。これも実際の銚頭の回転運動に影響を及ぼす要因であるが、どのくらい後方に位置すれば回転しないのかという線引きは難しい。本論ではPの位置そのものよりも抵抗装置との相対的な位置関係を重視した。
- 23) このような繫索の装着方法については山浦が論じている（山浦 1980b）。
- 24) 開窩式で索紐兼用式の場合、通常は窩が作られている面が腹面となる。しかし距が片側に寄っている資料では、側面に窩が作られているという理解も可能になる。混乱を避けるため索紐兼用式の場合は全て窩が作られている面を腹面とする。
- 25) 沼津型に相当する資料（雄形銚頭）もあるはずだが触れられていない。
- 26) 「全体的に柳葉形を呈し・・・先端はすどく造り出され・・・尾部も主に尖っている。ほかに水滴状にふくらむものや平形彫刻刀状のものも仲間として含めておきたい」（大塚 1966）。小幌洞窟と茶津2号洞穴の資料を先行段階として抉入離頭銚に含めていないことから明らかである。
- 27) なお大島は「恵山式銚頭」という呼称も用いているが、これは渡辺の「恵山型」とは異なり、恵山文化の銚頭全体を指して使われている（大島 1988a・b）。
- 28) 前述したように渡辺は「離頭銚」は全て回転式だとする立場なので、当然このような抵抗機能の転

換は考えていない。

- 29) 山浦はこれを「雌型銚頭の系統は雌型銚頭に求めるべき」と表現している（山浦 1999）。
- 30) この点は安齋により批判されている（安齋 1997）。
- 31) 佐藤が本輪西貝塚の資料について述べたのが燕形系統説の最初であろう（佐藤 1954）。
- 32) これに対して渡辺は祝津例（図8-1）、恵山貝塚例（図10-4）、フゴッペ洞窟例（図14）をまとめて「続縄文文化期時代に伝播した燕形離頭銚頭」と捉えたために、大塚が指摘した第3種の中での差を無視することになってしまった（渡辺 1973）。
- 33) 瀬川が南有珠7遺跡の資料によって示したものである（瀬川 1984）。
- 34) 引用文献（室蘭市民俗資料館 1990）中では図示した資料も含めて絵鞆遺跡出土とされている。両遺跡は隣接した遺跡であるので、とりあえず全て祝津貝塚出土としておく。
- 35) 未発表資料の使用の許可を頂いたことを感謝したい。またこれらの資料の観察にあたっては伊達市教育委員会の大島直行氏、青野友哉氏、小島朋夏氏に大変お世話になり、また貴重なご教示を頂いた。
- 36) 有珠モシリ遺跡では改葬が行われていたことが確認されており、同じ墓に伴った資料であっても必ずしも同時に副葬されたものとはいえない。
- 37) もう1点「骨銚の先」として報告されているが、頭部破片で分類不能である。
- 38) 礼文華貝塚と同一遺跡の可能性もあるが、詳細不明である。
- 39) 2000年度報告予定の資料であるが、礼文町教育委員会のご厚意により掲載させて頂いた。
- 40) もっとも単距の2点（図8-1・2）では直線化しているとはいえない。
- 41) 第3種銚頭の製作における鉄器の使用は木村が指摘している（木村 1983）。また西本は第4種銚頭の原材の使い方を鉄器の導入によるものとして解釈している（西本 1989）。
- 42) 燕形銚頭における繫索の装着方法について、金子はループ状に通した復元図を示したが（金子 1973）、山浦は結び目を作って留める方法を考え（山浦 1980b）、馬目はさらに別の方法による復元図を示している（馬目 1983）。山浦、馬目の方法ではいずれも索孔の腹面側開口部から繫索が出るように装着されることを想定している。力のかかり方が左右対称になる山浦あるいは馬目の説が有力であろう。
- 43) フゴッペ洞窟の資料の捉え方については安齋正人先生よりご教示を受けた。
- 44) このような頭部の形態はオホーツク文化の雄形銚頭にみられる。
- 45) 本論では鉤と距を区別しているので2～3段の鉤に相当する。
- 46) この点から有珠モシリ4号墓段階の中でも恵山貝塚と有珠モシリ4号墓とを細分することができるかもしれないが、本論では行わなかった。

《図の出典》

表1：第4種は内山1989より転載，他は図10・15・22・25参照

図4：図8・18・21参照

図5：山浦1999より転載

図8-1，図14，図18-6・9：渡辺1973より転載

図8-2：長谷部1926aより転載

図8-3，図25-1・3：大場1962より転載

図8-4・8：三橋1983に加筆

図8-5：萱場他1952より転載

図8-6・9・10，図15-12，図17-6・7・9・10，図24：東京大学総合研究博物館所蔵資料を筆者が実測

図8-7，図9-1，図10-2，図15-3～5・9，図22-1・2・7・8，図23-2：大島1988aに加筆

図8-11，図15-10・11，図18-4：三橋1983より転載

- 図8-12：北大解剖学教室調査団1953より転載
図9-2～4・6・7，図10-1，図12-1・2，図15-1・2・6～8，図22-3～6・9，図23-1・3～9：伊達市教育委員会所蔵資料を筆者が実測
図9-5，図13-4，図18-7・8：佐藤1954より転載
図10-3～6，図16-1～4，図18-10～18，図19-1～16：佐藤・五十嵐1996より転載
図11：図8～10・14参照
図13-1：厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会1972より転載
図13-2：種屯内遺跡調査団1999より転載
図13-3，図17-11：兒玉・大場1952より転載
図16-5～14：赤石・中岡2000より転載
図16-15・16：釧路市埋文センター1996より転載
図17-1：種屯内遺跡調査団2000より転載
図17-2～4：西本2000bより転載
図17-5：礼文町教育委員会所蔵資料を筆者が実測
図17-8：山浦1993に加筆
図18-1～3，図21-1～10：大島1988bより転載
図18-5：峰山1984に加筆
図20-1・2：内山1989より転載
図20-3～9：余市町教委2000より転載
図25-2：釧路市埋文センター1999より転載
図25-4：小笠原1984より転載
図25-5：山浦1993より転載

《引用・参考文献》

- 赤石慎三・中岡利泰編 2000『油駒遺跡』えりも町教育委員会
厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会編 1972『北海道厚岸町下田ノ沢遺跡』（1980復刻）北海道発掘調査シリーズ No. 8，北海道出版企画センター
安斎正人 1997「回転式銚頭の系統分類—佐藤達夫の業績に基づいて—」『東京大学考古学研究室研究紀要』第15号，39-80頁
石川直章 1998「回転式銚先再考」『時の絆』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会，293-313頁
上野秀一・加藤邦雄編 1987『K135遺跡4丁目地点5丁目地点』札幌市文化財調査報告XXX，札幌市教育委員会
右代啓視・平川善祥・小林幸雄・赤松守雄・門崎允昭・為岡進 1992「大成町貝取澗2洞窟遺跡第2次発掘調査概報」『北海道開拓記念館調査報告』第31号，175-186頁
内山真澄編 1989『茶津洞穴遺跡発掘調査報告書』泊村教育委員会
大島直行 1988a「続縄文時代恵山式銚頭の系譜」『季刊考古学』第25号，26-30頁
大島直行 1988b「北海道続縄文時代の漁労具—恵山式銚頭について—」『考古学ジャーナル』No.295，13-16頁
大島直行・石田 肇・百々幸雄・川内 基 1988「1 北海道有珠10遺跡」『日本考古学年報』40，347-352頁
大島直行・石田 肇・松村博文・百々幸雄・川内 基 1989「2 北海道伊達市有珠10遺跡」『日本考古学年報』41，386-390頁
大竹憲治 1991「弥生時代における閉窩式離頭銚の南進と北進」『十勝考古学とともに』十勝考古学研究所，63-69頁
大塚和義 1966「抉入離頭銚」『物質文化』7，33-46頁

続縄文時代前半期の銚頭の研究

- 大塚和義 1976「アイヌのキテの諸系列」『国立民族学博物館研究報告』1巻4号, 778-822頁
- 大場利夫編 1962『室蘭遺跡』室蘭市・室蘭市教育委員会・市立室蘭図書館
- 小笠原忠久編 1984『恵山貝塚—続縄文時代の墳墓群の調査—』尻岸内町教育委員会
- 小樽市博物館編 1962『茶津洞窟遺跡』
- 加藤邦雄他 1983『瀬棚南川(本文篇)』瀬棚町教育委員会
- 金子浩昌 1973「北海道縄文時代の骨角製銚頭と栄磯岩陰の資料」『栄磯岩陰遺跡発掘報告』島牧郡島牧村教育委員会, 43-54頁
- 金子浩昌 1980「銚頭の変遷」『歴史公論』第六巻五号(通巻54号), 113-121頁
- 金子浩昌・忍澤成視 1986『骨角器の研究 縄文篇』I・II, 慶友社
- 萱場敏郎・岡根博道・清水孝一 1952「豊浦町遺跡の調査報告」『噴火湾沿岸の縄文文化遺跡』北海道伊達高校郷土研究部, 48-50頁
- 北構保男 1939「北海道稚内町付近の先史時代遺跡調査豫報」『上代文化』第拾七輯, 32-49頁
- 木村英明 1983「骨角器」『縄文文化の研究』第6巻, 雄山閣, 143-165頁
- 釧路市埋蔵文化財調査センター編 1996『釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅲ』釧路考古学研究会
- 釧路市埋蔵文化財調査センター編 1999『釧路市幣舞遺跡調査報告書Ⅳ』釧路考古学研究会
- 楠本政助 1960「宮城県南境貝塚出土の離頭銚頭について」『東北考古学』第1輯, 34-36頁
- 楠本政助 1969「縄文中期における古式離頭銚頭の変遷」『古代文化』XXI 3・4, 29-40頁
- 楠本政助 1973「第1編第2章第十七節 縄文時代の漁撈活動」『矢本町史』, 121-201頁
- 兒玉作左衛門・大場利夫 1952「禮文島船泊砂丘遺跡の発掘に就て」『北方文化研究報告』第七輯, 167-269頁
- 後藤 明 1982「北方考古学における骨角製漁具の技術と機能をめぐる諸問題」『北海道考古学』第18輯, 23-34頁
- 後藤 明 1992「二 銚漁—環太平洋的視点—」『海から見た日本文化』海と列島文化第10巻, 雄山閣, 189-220頁
- 駒井和愛・佐藤達夫 1964「オホーツク遺物の特色」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻, 東京大学文学部, 78-88頁
- 佐藤孝雄 2000「5. 骨角器」『浜中2遺跡発掘調査報告』国立歴史民俗博物館研究報告第85集, 170-203頁
- 佐藤達夫 1954「我が国における回転式銚頭について」(『東アジアの先史文化と日本』1983所収, 349-375頁)
- 佐藤智男・五十嵐貴久 1996「能登川コレクションの骨角器について」『市立函館博物館研究紀要』第6号, 1-32頁
- 瀬川拓郎 1984「附篇二 伊達市南有珠7遺跡出土の骨角器について」『伊達市南有珠7遺跡発掘調査報告』伊達市教育委員会, 231-235頁
- 瀧川 渉 1998「北海道における縄文時代銚頭の型式学的変遷とその機能について」『北海道考古学』第34輯, 93-104頁
- 種市幸生 1995「付編Ⅶ 『抉入離頭銚』とキテの成立過程—栄浦第二遺跡出土の『抉入離頭銚』をめぐって—」『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会, 509-527頁
- 種市幸生 1998a「キテをめぐる諸問題(後編)」『時の絆』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会, 315-347頁
- 種市幸生 1998b「キテをめぐる諸問題(前編)—雌型銚頭の分類について—」『列島の考古学—渡辺誠先生還暦記念論集—』1-11頁
- 種屯内遺跡調査団 1999「種屯内遺跡第3次発掘調査概要(1997年)」『利尻研究』18, 107-141頁
- 種屯内遺跡調査団 2000「種屯内遺跡第4次発掘調査概要(1998年)」『利尻研究』19, 101-135頁

- 千代肇 1984『続縄文時代の生活様式』考古学ライブラリー29, ニュー・サイエンス社
- 角田隆志 1999「北海道南西部の縄文時代銚頭にみられる文様について」『北海道考古学』第35輯, 61-68頁
- 名取武光 1933「利尻・禮文両島に於ける考古學的調査報告」『史前学雑誌』第五卷第三號, 1-30頁
- 新美倫子 1990「縄文時代の北海道における海獣狩猟」『東京大学考古学研究室研究紀要』第9号, 137-171頁
- 西本豊弘 1984a「北海道の縄文・続縄文文化の狩猟と漁撈」『国立歴史民俗博物館研究報告』第4集, 1-15頁
- 西本豊弘 1984b「第3節 骨角器」『南有珠6遺跡』札幌医科大学解剖学第二講座, 36-40頁
- 西本豊弘 1989「第3節 骨角貝製品」『茶津洞穴遺跡発掘調査報告書』泊村教育委員会, 46-51頁
- 西本豊弘・大島直行 1988「北海道の続縄文時代以降の骨角器」『月刊文化財』No.290, 56-60頁
- 西本豊弘編 2000a『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 西本豊弘編 2000b『浜中2遺跡発掘調査報告』国立歴史民俗博物館研究報告第85集
- 長谷部言人 1926a「本輪西貝塚の鹿角製銚頭」『人類学雑誌』第四十一卷第七號, 471-475頁
- 長谷部言人 1926b「燕形銚頭」『人類学雑誌』第四十一卷第三號, 141-145頁
- 馬場脩 1937「千島群島出土の狩猟具及び漁具」『民族学研究』第三卷第二號, 89-131頁
- ヒラリー・スチュアート著, 木村英明/木村アヤコ訳 1987『海と川のインディアン—自然とわざとくらし』雄山閣
- フゴッペ洞窟調査団 1970『フゴッペ洞窟』ニュー・サイエンス社
- 北大解剖学教室調査団 1953「小幌洞窟遺跡」『北方文化研究報告』第十八輯, 179-287頁
- 前田 潮 1967「『有溝型銚頭』についての二, 三の問題」『大塚考古』第8号, 11-18頁
- 前田 潮 1974「オホーツク文化とそれ以降の回転式銚頭の型式とその変遷」東京教育大学文学部『史学研究』第96号(『北方狩猟民の考古学』(1987)所収, 同成社, 65-114頁)
- 前田 潮 1980「古代銚頭の系譜」『歴史公論』第六卷五号(通巻54号), 39-44頁
- 前田 潮 1997「擦文文化の回転式銚頭」『国立歴史民俗博物館研究報告』第70集, 97-121頁
- 前田 潮 2000「恵山文化の銚頭について」『海と考古学』第2号, 15-22頁
- 馬目順一 1983「閉窩式回転銚」『縄文文化の研究』第7卷, 雄山閣, 210-224頁
- 三橋公平編 1983『南有珠6遺跡』噴火湾沿岸貝塚遺跡調査報告1, 札幌医科大学解剖学第二講座
- 峰山 巖・山口 敏 1972「第一編 先史時代」『豊浦町史』豊浦町, 3-132頁
- 峰山巖編 1984『伊達市南有珠7遺跡発掘調査報告』伊達市教育委員会
- 室蘭市民俗資料館 1990『室蘭の文化遺産-改訂版-』室蘭市教育委員会
- 山浦 清 1973「回転式銚頭について」『大塚考古』第12号, 10-14頁
- 山浦 清 1980a「民族誌にみる銚の構造と機能」『季刊どるめん』26号, 7-20頁
- 山浦 清 1980b「北西太平洋沿岸地域における回転式銚頭の系統問題」『物質文化』35, 1-15頁
- 山浦 清 1993「『環オホーツク海文化』という視点—銚頭の分析から—」『北海道考古学』第29輯, 9-19頁
- 山浦 清 1996「日本先史時代回転式銚頭の系譜」『ヒト・モノ・コトバの人類学』国分直一博士米寿記念論文集, 慶友社, 545-556頁
- 山浦 清 1999「漁撈具から見た弥生文化と恵山文化」『物質文化』66, 35-44頁
- 余市町教育委員会編 2000『入舟遺跡発掘調査報告書(1998・99年度)』
- 渡辺 誠 1973『縄文時代の漁業』雄山閣
- Leroi-Gourhan A. 1946 *Archéologie du Pacifique-Nord: Matériaux pour l'étude des relations entre les peuples riverains d'Asie et d'Amérique*, Institut d'Ethnologie, Paris.

Harpoonheads in the First Half of the Epi-Jomon Period

Ken TAKAHASHI

In the first half of the Epi-Jomon period, a great variety of harpoonheads were used in Hokkaido. They were often decorated and buried in graves. This article tries to establish their classification and chronological sequence and consider their genealogy.

Harpoonheads are classified by the way they are hafted, and the resistance they generate in the body of the target. These two points have often been confused, but they should be treated separately. When classifying according to resistance, harpoonheads are usually classified into barbed harpoonheads and toggle harpoonheads. The criteria for this classification have been unclear, but in this article harpoonheads meeting the following criteria are classified as toggle harpoonheads:

1. The tension of the line and the resistance the harpoonhead meet in the target produce a moment of force which rotates the harpoonhead.
2. Spurs or barbs are located in the rear of the line hole or the line groove.

Epi-Jomon harpoonheads are classified into five categories: No.1, male-barbed; No.2, female-closed socket-barbed; No.3, female-closed socket-toggle; No.4, female-open socket-toggle (line also used for lashing the shaft or the foreshaft); No.5, female-open socket-toggle (line not used for lashing the shaft or the foreshaft) (Table 1).

This article examines harpoonheads found in 26 Epi-Jomon sites (Fig.6, Table 2). No.4 harpoonheads are the traditional form common in prehistoric Hokkaido. No.5 harpoonheads are rare and exceptional in the Epi-Jomon period. This article discusses mainly No.1~No.3 harpoonheads, which existed in large numbers in the Epi-Jomon period, particularly in the first half, but did not exist in the preceding Jomon period or the succeeding Satsumon period.

A chronological sequence was established by using a great variety of No.3 specimens from southern Hokkaido, especially the sites around the Funka-wan Bay. They are classified into Group A (Fig.8) and Group B (Fig.9, 10) by the shapes of the cross sections of their bodies, and the latter are subdivided into four groups (B0~B3) by the shapes and positions of their line holes. Using the available stratifical data, three stages are provisionally established: *Minami-Usu 6 site strata VI* stage, *Usumoshiri site shell midden* stage, and *Usumoshiri site grave No.4* stage (Fig.11). They correspond to Group A, Groups B0/B1, and Groups B2/B3. These stages belong to the second half of the Esan culture, which is almost equivalent to the first half of the Epi-Jomon period in southern Hokkaido. This writer agrees with the widely-held view that No.3 harpoonheads originated from the Tohoku region.

No.1 harpoonheads (Fig.15~17) were already widespread in the beginning of the Epi-Jomon period and can be found at *Usumoshiri site grave No.4* stage. They are generally considered to be of Tohoku origin but the possibility that they originated north of Hokkaido cannot be denied.

No.2 harpoonheads are unique to the Esan culture. There are no harpoonheads resembling them in the neighboring region, and the genealogy of these harpoonheads has been much discussed. They are classified into Group A with sharp points (Fig.18~20, Fig.21-5~10, Fig.22-6~9) and Group B with spoon-like heads for putting on end blades (Fig.21-1~4, Fig.22-1~5, Fig.23). Group A appeared in *Minami-Usu 6 site strata VI* stage, while Group B appeared in *Usumoshiri site grave No.4* stage. This article concludes that, with regard to No.2 harpoonheads, Group A evolved under the influence of No.1 harpoonheads (barbed) and No.3 harpoonheads (closed socket) during the Esan culture, to be later followed by Group B.